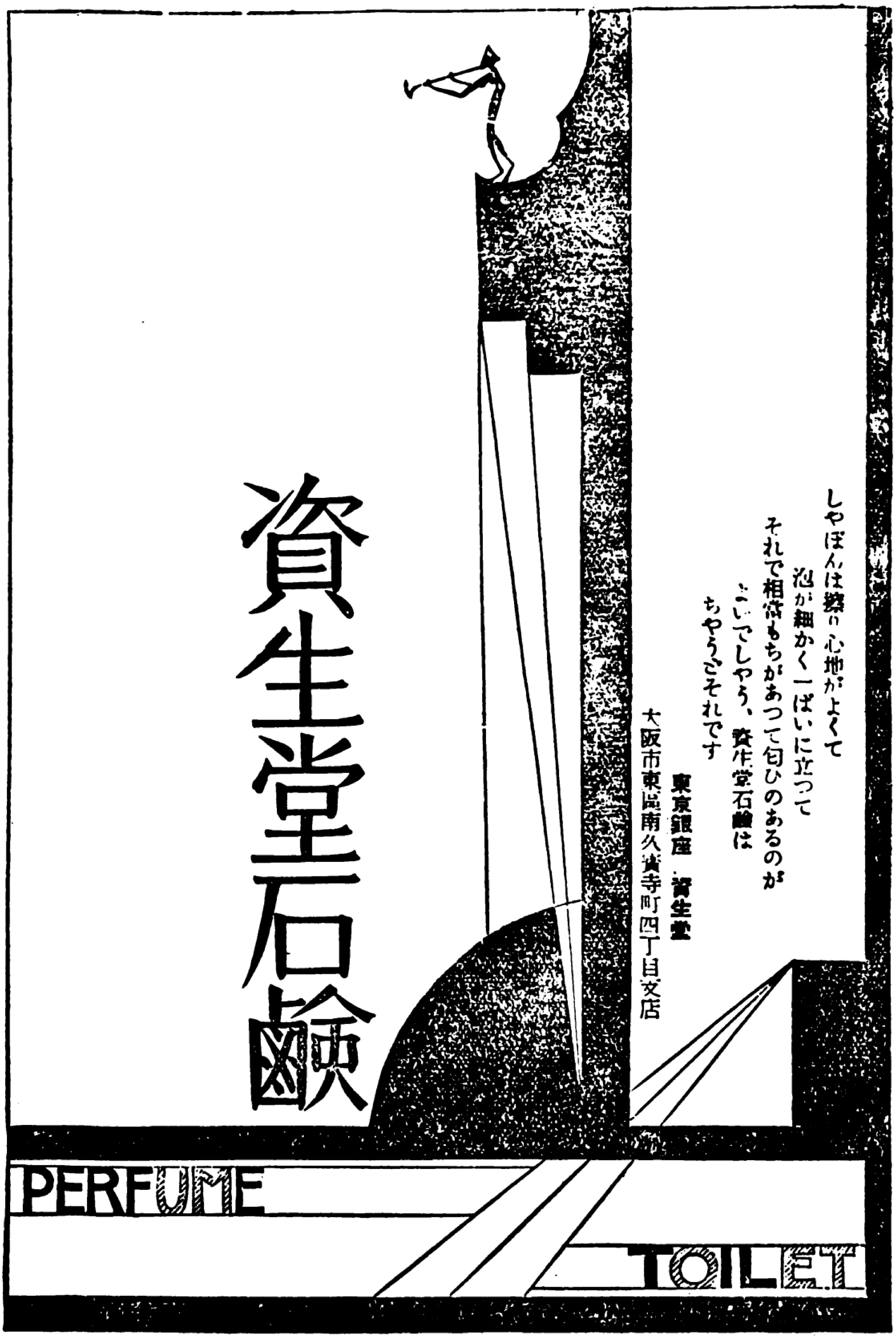
大正十三年十一月二十二日第三種郵便物認可
大正十[illegible]年十二月二十九日印刷納本
大正十[illegible]年一月一日發行

婦人と勞働

一月號



職業婦人社發行


資生堂石鹸
しやぼんは擦り心地がよくて
泡が細かく一ぱいに立つて
それで相當もちがあつて匂ひのあるのが
よいでしやう、資生堂石鹸は
ちやうどそれです
東京銀座 資生堂
大阪市東區南久寳寺町四丁目支店
PERFUME
TOILET

新年に際し謹んで諸兄諸姉の
多幸ならんことを祈ります

大正十四年元旦

婦業職人社

婦人と勞働（一月號）



年頭の辭

わが大正十四年を祝福しませう。

總活的に見てこれまでのわが國の婦人運動は、現實の生活といふ舞台を忘れた一個のレーゼドラマに過ぎませんでした。現實の生活——即ち生活母体を忘れた思想や運動は、よし、それがどんなに立派で、又どんなに華かに見えても、要するに浮草に咲く花にすぎません。浮草は渚の浮動にまかせませう。

然し乍ら、私たちの運動は斷じて浮草ではありません私たちは、私達の生活に卽して、眞に「われらの運動」を、わたし達自身の力で起さなければなりません。

顧みると、わが婦人運動の主体でなければならぬ無產階級の多數の婦人は、未だ長い眠から醒め兼ねてをります。とは云ひ乍らこの婦人たちが目覺めて起つた時、そこにどんなに力强い、眞劍な運動が初められることか。

あゝ、私たちは倍舊の元氣で曉の歌をうたひませう。

婦人と時事

物價騰貴と キンケンチヨチク

十一月二十九日綿糸現物は、富士紡二十手四百圓となり、十月末の三百五十圓から見ると、一ヶ月五十圓の暴騰で實に戰後の新高値を示した。これにつれて衣服の材料も値上げの勢ひを示し、米穀類、野菜、雜食料品に至るまで物價は一齊に高くなつた。商業會議所で調べた所に依ると、日用品四十七種の、十一月下旬市內小賣相場は、去年の暮に比べて平均一割二分の高値になつてゐる。白米は三等四十二錢が四十九錢五厘に、餠米四十二錢が五十七錢に、麥二十錢が二十四錢となり、玉葱百匁四錢五厘は二倍の九錢となり茶一斤二圓は五割高の三圓に、鷄卵百匁五十五錢は三割高の七十二錢に、一番高くなつたのは澤庵で百匁八錢位が十二割高の二十錢となつてゐる。衣料品では綿糸高が鋭敏にエイキヨウしてさらし木綿一反九十五錢が一圓十錢になつたのを筆頭に木綿の縫糸一圓二十錢が一圓八十錢に、かなきん裏地一反二圓が二圓三十錢に、モスリン四十錢が四十二錢になつてゐる。安くなつたものはただ、大豆、小豆、木炭、薪などの數種にすぎない。

本年の六月以來七月に九厘の下落をみただけで、その後はずつと、八月に三分九厘、九月に二分五厘、十月に二分九厘、十一月に六厘と、だんだん高くなつて結局九分の騰貴となつてゐるばかりか、とても下落しさうな模樣はない。

かやうに物價は騰るばかり、而も失業者數十萬と云はれてその上にも殖えるばかり、官公吏の失業者ばかりでもこの暮に數萬と云ひます。それに對して政府は何の施設もしないばかりか盛んにキンケン、チヨチクを奨勵してゐます。然し食ふや食はずでゐる多くの民衆に、この上何を勤儉し、何を貯蓄せよと云ふのであらう。

男女共學の叫び

東京の私立大學中で女子の聽講生を入學させてゐるのは東洋、日本、早稻田、帝大で、それぞれ數人乃至數十人（日本大學は最も多數で百名を越ゆ）の女子學生が男子と双んで勉學をしてゐるが、何れも同じ時間數だけ同じ講師に就て同じ學科目を學んでゐるに係らず、正科生となる事が出來ず、従つて卒業後も何の資格も持

ないので（これは、予科、高等學校にあたる女子の學校がない爲に女子はさういふ過程をふまないで大學に入る事になつてゐるからである）女子聽講生が各大學女子學生聯盟を組織して、再三文部省に男女共學、機會均等を陳情したが、一方盛んに輿論を喚起して解決の道を開くこととし、女子高等教育問題の演説會を開いた。

然し、女子にも大學を男子と同じ様に開放して男女共學の道を開くことの必要は當然の事である、がこれはもつと根本問題から入つて、中等教育女學校の教育を、現在のやうな、紙人形式な、高等女中養成のものをまづ改めて少なくとも男子の中學と對抗し得るものに引上げてゆかねばならぬ。更にさらに根本問題としては、さういふ大學とか專門學校とかにも正式にも、不正式にも入學の出來ない澤山の貧乏人がある事である。私たちは、男女はむろん、貧しい者も富める者も、希望するところの全ての人々が自由に入學が出來て、愉快に勉强が出來る様な高等な學校の出來る事を一層切に望んでゐる

無産政黨と婦人

新聞紙の傳へるところに依ると、政治研究會では、早くから各地方に支部を設けて、無産政黨を組織する準備をしてゐたが、いよいよ今度の議會で普通選擧が實現されさうなので、もつと具体的な準備に就く第一着手として、總同盟と諒解の下に、双方から無産政府黨に關する草案を持寄つて打合せ、折衷案を作つて社會民主黨といふ名前の下に、無産階級の解放を目的とする新しい政黨を作ることになつた。加入するものは、總同盟系の各團体農民組合政治研究會フエビアン協會等の無産階級を中心として、事實上あきらかに無産者であるところの智識階級の大衆を纏めた廣い立場に立つて、イギリスの勞働黨の進み方に學んでやつてゆかうとしてゐる。

婦人の參政權運動も、今度はいよいよ各方面の婦人を多數に纏めあげた婦人參政權獲得期成同盟會が成立して、實際運動に入ることになつた。但し、これは漠然と婦人といふ名の下に合同したところの各階級の婦人の集りであるが、一般婦人が、今少し自分自身の立場にめざめて來る頃には、同じく婦人といふ名につながる者の間にも、相反する立場に立つ者がある事に氣附いて、政治運動でも、それぞれ別れてゆくのが當然である。



婦人の社會事業に缺けて居るもの

大山郁夫

一

婦人たちの社會運動、若しくは社會事業への參加の傾向は、近來相當に增進して來たやうに見られるが、しかしその熱度となると、一般に余り高まつて來てゐないのではなからうか？　私にはどうもさう思へてならない。若し私が、斯ういふことが事實に相異してゐるならば、私が婦人たちからお叱りを蒙らなければならないのは覺悟の前だが、しかし、私は寧ろ、そのお叱りを蒙るのを希望するやうな氣持になれるのである。

また、社會運動若しくは社會事業の中へ算へられないのを普通とするところの、例の婦人參政權要求運動にしても、どうも、數年前に新婦人協會がそれをやつてゐた時ほどの活況が見えないのではなからうか？　無論、新聞の社會面で興味本位で取扱はれるやうな、所謂「女政客」たちの輩出は、從前よりは大分頻繁になつて來たやうであるが、さうした埒もない現象は、少くとも私には、俗謠の流行り廢たりほどの意味もないものである。

二

屢々新聞紙の社會欄の賑やかしにされてゐる、廢娼運動のやうな有意義な運動にしても、その外觀の花々しさの割合にはその實質がそれに伴つてゐないやうに、私たちには見られるが、實際はどんなものであらうか？　もとより廢娼問題の如きものは、賣娼制度を可能にしてゐる現存の資本主義的社會組織がそのまゝ維持される限りは、到底徹底的に片附かない問題であるには相異ないが、しかしさういふことは、多少の程度に於て、すべての婦人問題に關聯して――どころではなくすべての社會問題に關聯しても、――言ひ得られることである。だが我々は、それかと言つて、現在の資本主義的社會組織が自然に崩壞するまで、手を拱いて空しく待つてゐる譯に行かない。のみならず、我々が我々自身の力で出來る限りの範圍内に於て、現存の社會組織の缺陷から生じた眼前の社會問題を、縱へ不完全にでもせよ、一つ一つと片附けて行く事に努力することは、結局は、現存の社會組織の、全體の終局的崩壞を早めて行くことに貢献する譯合になるのである。で、私は斯ういふ意味に於て、廢娼運動の如き、現存の社會組織の下に於ては根本的解決の不可能な運動にも、婦人たちが――男子たちも無論だが――參加するのを、心の底から贊成するものである。

殊に、廢娼運動の如きは、誰れもが言つてゐる通りに、女性の生存上の威嚴の主張や、男子專制の社會制度への、糺彈などの意味を伴ふものであるから、それが底力の强いものとなつて進行するであらうことは、私たちが熱望を禁ずることが出來ないことである。否、苟くも、女性の、人間としての生活の向上を希求してゐる限りのすべての人々は、皆それを熱望してゐる筈である。が、それにも拘らず、この廢娼運動もまた、他の大抵の婦人運動と一樣に、その實質がその外觀に伴はない觀のあることが、私たちには歯痒く思はれるのである。少くとも、賣娼制度の野蠻さを一般世人に徹底させ、少くとも敎養ある男子をして、その存置を寬假することの恥づべきものであることを感じさせる位のところまでに、それが最早進捗してゐてい丶筈だと、私たちには考へられる。ところが、私たちの眼には、廢娼運動が線香花火のやうに、時々パッと華やかに光り出すが、しかしそれに根强い繼續性の伴つてゐるものとは、どうしても見られないのである。が、實際は果してどういふものであらうか？

三

私が上に、廢娼運動に關聯して言つたことは、一般の婦人の社會運動、若しくは社會事業の現狀に關聯して私が考へてゐることの、一例に過ぎないものである。少くとも、私の社會意識の上から見て、意義のあるものと思へるやうなそれらに關しては、私はさう考へてゐる。無論私は、私の社會意識の上から見て、意義なささうに思へるやうな種類のそれらに就いては、こゝでは何事をも言はうとは考へてゐない。

もとより、世間的には餘り眼立たないながらも、立派な仕事を健實に行つてゐる婦人の社會事業の現存してゐるものがあることは、私も知つてゐる。さうしたものは、さう數多くはないかも知れないが、幾らかはたしかにある。私たちのやうに、その方面のことに暗いものでも、それは承知してゐる。けれども、さうした事實があることを認めたところで、大體上、婦人の社會運動若しくは社會事業が、それに參加する者の實數が漸增する傾向があるにも拘らず、その實質がまだ甚だ振はない狀態にある、といふ一般論を變へる必要は、毛頭存在しないやうに見える。若し私が今言つたことが、幾らかでも事實の眞相に觸れてゐるものとすれば、次に起つて來る大切な問題は、さういふ事情の發生を促した原因が何であるか？といふ點に關聯するものであらねばならぬ。

私は今、この問題を精細に考察する暇を持たない。だが、私は、この瞬間にそれに關して私の意中に浮んで來た二三の要點を次に持ち出して、讀者たちの批判を乞はうと思ふ

四

日本の婦人たちが、一般に社會運動若しくは社會事業に不慣れだといふことは、多くの人々に依つて、屢々指摘されてゐることである。そして、それはたしかに事實でもある。封建時代の昔から引續き、久しく重要なる社會的行動から隔離されて來た我國の婦人たちが、彼等をめぐる樣々の障壁を突破して、——若しくはさうした樣々の障壁が徐々に撤廢されただけづつ、——次第々々に外部の社會生活の渦卷の中へ進み入りかけたのは、比較的に新らしいことである。それ故に、

彼等が單に社會運動とか社會事業とかと言はず、一般に社會的行動に不慣れなのは、無理もないことである。それは、事務的方面に關することについても言へるし、團體的訓練に關することについても言へるし、また社會意識の鍛練に關することについても言へるのである。

そのうち、事務的方面に關する一切の事項は、それに習熟することが、誰れにでも比較的に容易である。で、現在に於ては、婦人たちで優れた事務的才幹及び能力を示してゐるものは、人間の活動の各分野で、既に相當の數に於て見られる通りに、社會運動や社會事業やの上でも、幾らかは見られる。しかも、今後に於ては、さういふ婦人たちの數が、益々多くなる傾向があるだらうと豫想することも、極めて自然なことゝして肯定し得られるのである。

けれども、團體的訓練と、社會意識との缺乏は、我國の婦人たちの痼疾として、――我國男子たちも、この點に關しては餘り威張つた口を利けた義理ではないが、――その範圍が極めて普遍的であり、またその根底が極めて深刻である。だが、苟しくも社會運動若しくは社會事業に首を突ツ込みかけた婦人たちは、これら二つの問題だけは、どうあつても、何よりも先に解決しなければならないのである。少くとも、私たちの社會意識から見て意味のありさうに思へる社會運動若しくは社會事業に從事してゐる婦人たちは、是非ともさうしなければならないのである。でなければ、彼等はどれほど踠がき焦つても、到底その方面で、充分な效果を擧げることを期待することが出來ない筈である。

五

團體的訓練は、一面に於ては、婦人たちが社會運動とか、社會事業とかのやうな、團體的行動を前提とする仕事に實際上從事して居る間に、自然と體得することが出來るものだ、といふことは、或る點までは事實である。この意味に於て「習ふより慣れろ」といふやうな格言は、この場合にも通用が出來る。婦人參政權要求運動とか、或はまた、その運動の成功した曉に豫期し得られる婦人の政治的行動とかの如きものは、この點から言つても、決して無意義なるものではない。もとより私は、一切の婦人問題が、――殊に婦人の社會的解放問題が、――婦人の政治への參加に依つて解決が出來る

ものだと考へて居る譯ではない。さうした問題は、現存の社會組織の改廢に繋がるところの、もつと根本的な性質のものである。けれども、現在の婦人の實生活上の或る手近な諸問題が、婦人の政治への參加に依つて、少くとも解決される端緒が開けるといふ事實の外に、それは、婦人たちの社會運動若しくは社會事業の發達のために必要な、團體的訓練をつける効果を擧げる可能性が、たしかにあるものである。私はそれ故に、婦人參政權要求運動が現在の婦人問題中、唯一の最重要問題だとは思はないが、しかし、可なり大切な諸問題中のうちの一つだとは考へてゐる。

けれども、團體的訓練が、實際の社會運動若しくは社會事業への參加に依つて習得することが出來る範圍には、自から一定の限度がある。それは要するに、團體的訓練の一部分丈に止まるものである。しかもその甚だ重要ならざる一部分だけに止まるものである。團體的訓練の最も重要なる部分は、團體的訓練そのものを必要とする團體行動の目的を意識すること、及びその團體行動を繞ぐる周圍の社會關係を理解することに依つて、最も有効に進められ得るものである。否、それに依つてでなければ、有効に進め得られないものである。從つて、婦人の社會運動若しくは社會事業に必要な團體的訓練の問題は、その究極に於ては、私が次に述べようとしてゐるところの、あらゆる意味に於ける社會意識の鍛練といふ點に對して、最も密接な關係に依つて繋がれてゐるものである。

六

あらゆる社會運動若しくは社會事業の動機は、或る種の社會意識から來るものでなければならない。でなければ、それが充分の効果を擧げることが出來るものではないのである。また、事實上に於ても、あらゆる社會運動若しくは社會事業は反動的のものにもせよ、進歩的のものにもせよ、それぞれに、それに相應する社會意識の衝動から來るものである。ただしかし、それに參加する個々の人々の中には、さうした社會意識の分け前を少しも持たずに、唯漫然と或は名聞を求めるためとか、或は流行を追ふためとか言つたやうな、極めて輕薄な動機——しかも個人意識の著るしく勝つた動機——だけに依つて行動を促進されるものが非常に多くあることは、屢々我々の注意に上る事實である。我國の現在の婦人

の社會運動や社會事業の上にも、さうした現象が見られなければ幸である。

婦人解放問題は、結局社會組織の變改の問題に關聯するものである。それは、人類の歴史に於て、婦人の隷屬的地位が、私有財產制度とその起源を一つにしてゐるといふ事實からも、推論し得られるものである。それ故に、婦人解放問題の解決に直接間接に關係のある社會運動若しくは社會事業に從事するものは、常にそれが直接また間接に、現存の社會組織に働き掛けてゐるものであることを、眼中に置かなければならないものであることは、無論である。が同時に、個々の社會運動若しくは社會事業は、それが行はれる時に、それの周圍にある社會的諸關係若しくは社會的環境を背景として行はれるものである以上、それに從事するすべての人々は、一定時に於ける社會的諸關係若しくは社會環境に關する正しき理解若しくは智識を持つてゐる事をも、必要とするのである。そして、さうした理解若しくは智識は、社會運動若しくは社會事業への參加の動機と共に、廣い意味に於ける社會意識に關聯する問題である。

すべての人々の生活は、その一面に於て社會生活である。從つてすべての人々が思惟し、行動することは、その一面に於て社會的に思惟し、行動することである。それ故に、自己の社會意識を鍛練することは、すべての人々の生活に於て最も大切なことである。が、私が殊に我國の婦人達の場合に關して、それを强調する所以のものは、一般的見地から言へば彼等にはそれが特に缺けてゐるからである。近來我國の婦人、生活が、或意味に於て著るしく自由になつて來たことは、たしかに事實である。今假りにその一二の例を擧げると、樣々の運動競技への參加の機會が婦人に向つて提供されたり、樣々の職業への通路が婦人に向つて開かれたり、多くの大學に於ける聽講が婦人に向つて許されたりするやうになつて來たことの如きは、さういふことの指標と見ることが出來るものである。で、多くの婦人たちは、さういふことは、婦人解放問題の一部解決であるとさへ考へてゐる。いかにも、それはさうだと言へなくはないが、しかし同時に、それは多くの場合に於て婦人の個人的解放に關係するものであつて、婦人の社會的解放に關係するものでないといふことは、我々が記憶しなければならないことである。そして、婦人解放問題の重心點は、どこまでも、婦人の社會的解放の上にあるもので

ある。この點が我國の婦人たちの最も多くのものに依つて理解されてゐない事實も、私に言はせれば、彼等の社會意識の低級なところから來てゐるのでなければならないのである。

七

近來諸大學の門戸が婦人たちに向つても開かれるやうになつてから、專門の諸學術に對する彼等の興味が幾分增進したやうに見える。これは、大體論としては、喜ぶべき傾向であるには違ひない。けれども、さうした諸大學での聽講の機會を利用する婦人たちの多くは、主として文藝方面の興味に驅られがちで、偶ま自然科學の方面へ足を向けるものも折々はある位で、社會科學の研究に志すものは、不釣合ひに少いやうに見受けられる。時としては、社會科學の方面を覗いて見る婦人たちも全然ない譯ではないが、しかしそこで永續きのするものは、非常に少いやうである。かういふことが、すべて彼等の社會意識の缺乏だけから來てゐるものとするのは、或は間違ひであるかも知れない。が、しかし、全然それに關係がないものでもなささうに、私には考へられるのである。

いづれにしても、一般の上からいへば、我國の婦人たちの間に於て社會的智識が、學術上の方面に關しても、實際上の方面に關しても、非常に大なる比率に於て缺乏してゐることだけは、爭はれない事實である。私たちの立ち場から見ればそれはそのことだけとして見ても甚だ困つたことだが、殊にそれが婦人の團體的訓練の缺乏といふ事實に交渉してゐるのであることを考へるとき、私には殊に最も輕視が出來ない問題のやうに見えるのである。私はそれ故に、本文でこの點を强調して、それを讀者たちに訴へた次第である。



職業婦人の經濟的地位

山川菊榮

一

今日の日本の社會には、經濟生活の變化に伴つて、婦人の生活に、非常な歴史的變化が起つて來て居ります。未婚既婚を問はず、職業婦人の數は逐年增加し、それと共に、人として、女としての婦人の利益を擁護するために、婦人の間に組織的な運動を發達させる必要が、漸く痛切に感ぜられるやうになりました。けれども只だ漫然と「女だから」といふ理由だけで集つたのでは、貴婦人達の社交團体同樣何等の意味もなく、又何等の力をも持つことが出來ません。そこで自分らが何故團結しなければならぬか、そしてどういふ目的に向つて進まねばならぬか、といふことをハッキリ意識しておくことは、現在の日本婦人にとつて最も必要なことなのであります。

ところで、私達は何故に團結しなければならぬか、又どういふ目的に向つて進まねばならぬか、といふことをハッキリ理解するには、先づ第一に、自分らが現在の社會でどういふ地位を占めて居るか、そしてどういふ状態におかれてゐるか、といふことを十分に知つておく必要があるのです。そこで、私は以下に、日本の現在の婦人の地位を、事實に即して解剖して行きたいと思ふのであります。

二

「現代の婦人の大部分は、重二の意味で奴隷である。即ち

無産者としては、有産階級の奴隷であり、婦人としては男子の私有物として取扱はれる。であるから、吾々はこの二重の隷屬狀態から解放されなければならぬ。」これは目覺ある無産階級の婦人の部でありますが、さてこういふ旗じるしの下に、いろ〳〵の方面で婦人の解放を求めてゐる婦人達の團結を促進しようとすると、そこに以外の反對論が起ります。その第一は、「私達は、中流階級の婦人であつて、決して無産者――氏素姓もない貧乏人、勞働者とは同じものでない。だから、私達は、特に女として、女のみが蒙る不公平な待遇には反對するが、一般の無産者と手を携へて私達の解放を圖ることなどは以ての外と考へる。」といふのであります。

更に第二は、「私達は、婦人として男子と異なつた使命を持ち、男子と異なつた能力を與へられて居る。だから、私達は、私達の現狀に滿足し、いかにして各々の家庭生活をもつと愉快にしてゆけるか、といふことだけを考へればよいので、それ以外のことは考へる必要がない。自分々々の家庭生活の範圍外のことは、すべて男子の領分であつて、自分らにはそんなことを考へる義務もなければ權利もない要するに、私達は、立派な家庭の女王であつて奴隷ではない。この正當な、そして愉快な私達の現狀を以て奴隷狀態と看做すのは、非常な誤解であり、僻みであるに過ぎない只だ貧乏な母親だけに、特に母性保護の恩典を設ける事以外に、吾々は社會に對して多く望むところはない。」といふのであります。

私はこの二つの反對論を、現在の事實に照して論評して行きたいと思ひます。

三

「私達はタイピストであつて女中ではない。私達は教員であつて女工とは違ふ。」現代の職業婦人の中には、かういふ階級的な誇りを以てゐる者が尠くありません。そして又「自分達俸給生活者乃至自由業者は、資本家階級と勞働者階級の中間に位する特別の階級で、社會の中堅たる中流階級とは俺達のことだ。」と己惚れてゐる者は、男子の中にも決して尠くはないのであります。

けれども實際の事實は、そういふ人々の註文にはあてはまつてゐないのであります。產業革命は社會の組織を一變

しました。維新以來外國の新しい生産方法を採り入れ、封建制度から一轉して資本主義の時代に入つた日本は、社會生活のどの方面にも、重大な變化を遂げたのであります。維新前まで、家來のお蔭で懐ろ手して大きな顔をして暮した大名や武士の階級は亡びた代り、其あとに資本家階級といふ、昔の大名や武士に當る支配階級が出現しました。今の世の中では、法律の前には萬人平等だといはれ、華族も平民も、金持も貧乏人も、人間としての權利には何の違ひもないといふことになつて居ります。けれども事實上、財産の有無によつて社會は二つの階級に分れ、教育でも、政治でも、金のある者によつて獨占され、金のある者の爲に運用する結果となつて居ります。そして其金は一体どこから出て來るかと云へば、皆な資本家の手足となつて働く人々の骨折から出て來る許りです。今日の世の中では、腕一本で何萬圓の身代を築き上げるといふことは不可能で り ます。親讓りの財産でもない限り、人は一足飛びに資本家になれる者ではありません。稀に、何千人に一人、勞働者から金持に成り上つた者があるとすれば、それは食ふものも食はず、讀むべき本も讀まず、爪に火ともすやうにして稼ぎためた僅かの資金に、自分の仲間の勞働者を廉く使つて利益を搾り取ることに成功した者でなければなりません今の世中では、働くといふことゝ、金が儲かるといふことゝは全然別問題であります。昔は、人々が物を生産するのは自分の一家及び極めて狭い範圍の顧客の直接の消費に供するためでありました。例へば女が機を織る場合、其布子は一家の着料とするのが普通で、余分のある場合に近所の者にもそれを分つ位のことでしたが、今の紡績や織物工場の場合は全然それと違ひます。工女達は、自分のためでもなければ子供のためでもなく、又親戚知人の消費にあてるためでもなく、只だ傭主から賃銀を得るために糸を紡ぎ布を織つてゐるのです。そして傭主は廉い賃銀で女工に織らせた布を高い値段で市場に提供し、差引非常な金儲けをすることになります。何の仕事でも此通りで、人が自分一人で働いてゐたり、人に使はれたりしてゐる限り、いくら一生懸命に働いても、いくら儉約をしても金の余る道理がなく、いはんや大金持となり得る道理はないので、金持となるには、どうしても人を使ひ、特に廉く使つて、其勞働から得た利益を搾り取らなければならないのです。

四

所で現代の事業は、昔と違つて大仕掛になつてゐます。五人や三人の人を使つて、小さな工場で主人が一所にコツ〱働くのではロクな金にもならず、最新の高價な機械を据えつけて、最も能率の高い方法で大仕掛に生産する者と競爭が出來ません。そこでそういふ小規模の企業は大規模のものに驅逐され、又は併合されて、漸次に資本の集中が行はれます。農業の方面では、小自作農が減少して大農小作農との對立が著しくなり、商工業の方面では、獨立の小店主又は小企業が、その地位を保てなくなつて大會社、大商店の使用人となつて行く傾向は爭はれません。そこで、今日の世の中には、昔のやうな社會的な階級制度は存立しなくなりましたが、其代り有產、無產の二大經濟的階級の對立は益々明白となり、昔の階級制度に劣らぬ人爲的制限を個々の成員の上に加へてゐるのであります。中間階級として認められる獨立の小商人、小工場主、自由業者の如きも、實質上決して獨立の階級をなして居る譯ではなく、資本主義の發達と共に、日に〱無產階級化しつゝあるので彼等が自分より一段下に見下してゐる勞働階級と、經濟的には同一地位に立つやうになつて來て居るのであります。收入の高から云へば、女事務員より遙に高い賃銀を得てゐる女工は少くありません。智識の點から見ても、官吏や會社員以上の讀書家や、卓越した識見の所有者は、勞働者の中に幾らでもあります。俸給生活者と筋肉勞働者との唯一の實際の違ひはたゞ、其賃銀の仕拂方法の問題であるといつてよく、共に資本家の利益に奉仕し、長時間の激務に服し、都合次第でいつ何時でも馘られる狀態に在ることは皆な共通の現象であります。

そこで自由業者も筋肉勞働者も、勞働を賣つて生活するといふ根本の點には何の違ひもなく、只だ賣る勞働の性質が多少違つてゐるといふだけに過ぎないのですから、資本家階級に對しては、共同の立場に立つものであり、又、資本家階級の利益を基礎として成立つてゐる今日の社會組織に對して、共同の利害關係を有する者だといふことが出來ます。随つて其職業は教員であらうと、事務員であらうと雜誌記者であらうと、看護婦であらうと、女工であらうと女中であらうと、賃銀のために勞働を賣る點では、實質上

何の違ひもないのでありますから、自由業に從事する者が自分だけ特別に上品な、高尚な中間階級だと考へて、勞働者とは違つた人種の樣に考へるのは大變な間違ひであります

五

今日、自己の境遇に眞底から滿足してゐられる婦人は尠いでありせう。無論その不平の中には、至つて個人的な不合理な、當を得ないものもあるにはありませう。が大体に於て共通な不平を綜合して見れば、自分らが現在の社會に於て正當なる地位を與へられて居らぬといふことに歸着するものと思はれます。が、それでは自分らが當然占むべき正當な地位といふのは、どういふ地位をさすか、といふことになると、甚だ曖昧な考へしか持たぬ者が多いのであります。即ち或人は婦人が參政權さへ得さへすればよいのだと考へ、或人は母性の保護さへ行はれゝばよいのだと考へるやうな有樣です。が、是等は決して問題の根本に觸れた解決策ではありません。たとへ婦人が參政權を得、又貧困な母親が育兒扶助料を支給されるやうになつたところで、貧富の對立といふ事實が除かれぬ限り、大多數の婦人は相も變らず、資本家の奴隸として勞働し、一生涯生活に追はれづめで、個性の發達とか、母性の滿足とかいふことを完全に獲得することは出來ないのであります。「自分達は無產者である。そして無產者として同じ階級の男女と團結することによつてのほか、行詰つた現狀を打開し、生活を向上させ、不平を取除く道はないのだ」といふことを自覺しない限り、婦人の救はれる道はありません。自分自身、貧乏人でゐながら、金持階級の定めた慣例や道德や氣分に捉はれて、自分らの本當の立場を覺ることが出來ず、立派な勞働者としての職業婦人の立場を恥かしいものゝやうに考へて、社會の寄生分子たる貴婦人令孃の眞似をするやうなことでは、到底奴隸の地位を脱することは出來ません。今日婦人の解放を求め、地位の向上を求める婦人、特に職業婦人にとつて最も必要なことは、自分が無產階級の一員だといふ明白な自覺、即ち階級意識であります。此根本的な自覺こそは、職業婦人の運動を明るみへ導く唯一の指針であり松火であつて、これなくして徒らに婦人の解放を求める結果は、闇夜地理不案內の山路へ迷ひ込むやうなもので、狼のやうな野心家の餌食にされたり、敵の捕虜にされぬとも限らないのです。

（未完）

「丸ビル問題批判會」

大東京のまん中、東京ステーションに對して、七階の宏壯な建物に文化の粹を誇る丸の內ビルデキングは、今や東京人士の中心興味として、スフキンクスとまで云はれて居ります。そして所謂丸ビル型とは、今日の東京の若い婦人たちの渴仰の姿です。

而かも丸ビル型の把持者丸ビル美人といふのは、誰あらう。實に朝毎に丸ビルに通勤する、一千の職業婦人の代名詞なのであります。そこへ突發したのが、例の丸ビル事件即ち、丸ビルの職業婦人の檢擧事件です。――カルメンお蝶とか、ジャンダークことさみ子等いふ仇名を持つた職業婦人が、丸ビルを中心にして盛んに男子の勤め人や學生を誘惑して淫蕩の氣を撒いてゐたのを、警視廳が檢擧したのです。――この事件以來、丸ビル勤務のまじめな職業婦人が迷惑を蒙つてゐるばかりでなく、丸ビルへ娘や妹を通はせてゐる世の父兄たち、又は丸ビルに事務所を持つて自ら職業婦人を雇つてゐる人たちの間に大恐慌を來してゐるといふのであります。

出席者

山田やす子　奥むめお　梅山一郎
村上秀子　小澤豊子　長島暢子
城越敏子　田上靜子　伊藤靜枝

この問題に就いて、一夜會合をしてみんなで話し合つてみたのが、大略左の速記の通りであります。時節柄興味深い題目でなくてはなりません。(記者)

◇　◇　◇

田上「こんな一二の不良少女の事件から丸ビル全体の職業婦人に濡衣がかゝつて『丸ビルに處女なし』など書き立てられるのは氣の毒だと思ひます。」

山田「それあ、全くさうです。然し世間で丸ビルを『スヒンクスだ…』といふ氣分を、私は省線電車に乗る毎に感じますね。何んだか束髮を、かう小山の様にパーと高くして特有な化粧顏をしたあの型は、丸ビル型といふか、それが揃つて東京驛でゾロゾロ降りて行く姿を見て、何時も何か異つた味を感じます。先日歸朝したある人の話に、アメリ

カ邊では、カフエーあたりで公然紳士と職業婦人がテーブルを圍んで物を食べながら、遊びに行く場所や値段の相談をしてゐるのを聞くことは珍らしくないさうです。若し其の場合、男が突然立つて出てゆく事があれば、それは値段の協定が出來なかつた時で、後に殘された職業婦人はそんな場合には、其の料理代も拂はねばならぬのださうです。かう云ふ氣分がだん／＼日本にも傳染して來たのでせう」

異口同音に「さう思ひますわ」

田上「三越等でも、賣場の店員の徽章の番號を覺えて置いて、あゝ娘と思ひ込んだら、たとへば「三十三番に會はして下さい」といふと、ちやんと會へるやうに連絡をとつて呉れるお婆さんがゐるさうですね」

梅山「丸ビルの下足番や、エレベーターの運轉手の中にもさういふ事をしてゐるのがあると云ふじやありませんか。寫眞を見せたり、住所を知らせたり、會はせたりするのが」

堀越「その事に就て私の最近の實驗があります。それは私の友達で工學士の夫人が、明治神宮きわの或る旅館を買ふて宿屋を始めた所、明治神宮參拜の泊り客は殆んどなくて、女を連れ込むお客の宿になるのに閉口してゐる例があるのです。私はまさかと思ふて、一日出掛けて其の帳場に座つて驚きました」

村上「いつもの堀越さんの探偵癖が出たんですね」

堀越「果してそんな客が、朝からやつて來ました。そして二時間もをると歸つて行くのです。女はメリンスの着物程度の女事務員型で、男は會社員らしいのが多く、殊に三十才過ぎの男が多いやうでした。そこの宿屋の奥さんは、儲かるが氣持が惡くてとこぼして、早く賣り拂ひ度いと云つてゐます」

奥「丸ビルの女が贅澤だと言はれてゐるが、大概銘仙か遠見で錦紗に見せるモスリン程度じやありませんか。それも水を潜つたらしい……。私の知つてゐる丸ビルに勤める人の話でも、みんな可なり切りつめてゐると云ひますよ。さうすると、もしこゝに職業婦人の墮落云々といふ事實があるとするなら、職業婦人は、そんなに切りつめてやらなくたつてユーヅーが附きさうなものですがね」

梅山「それに就いては、事實は一層惡いので、今の職業婦人は、墮落と云つても、それは男子に弄ばれてゐるのだと思ひます。勿論、初めは戀とか愛とかと、體裁のいゝ事を

振出しに初められるのであらうけれど、商賣女を買へば、少く共五圓なり十圓なり要るところを、薄給の身ではこのせち辛い世の中にそれも出來ずで、手取り早いところで、同じ机を並べて働いてゐる女に、眼をつけるのだと思ひます。」

山田「何處の新聞ですか、呉服店主の話で、職業婦人の俸給は平均三十五圓程度で、然かも大部分は親がかりだから普通にやつてゐれば喰へないと云ふ事はないと書いてあつたやうでしたわ、何んなものでせうか」

村上「女の俸給が尠いとか、贅澤するとか云ふ事も問題でせうが、それより私は男の問題だと思ひます。女を金で買つてよいと云ふ公娼を認めてゐる以上、男にさう云ふ卑劣な根性が養はれるのも、無理無いと思ひます。實際、遊廓にゆく男の內で獨身者は三分で、後の七分は立派に妻のある男ださうですからね」

堀越「藝者だつて、藝だけで立つて行くものは百人に一人の割合も六ケ敷そうですね」

奧「一体雇ふてゐる側の人はどんな氣持なんでせうか」

村上「却つて、其の不品行な事が、ある種の雇主には氣に入られるのだからたまりません」

奧「とにかく、美人の事務員を雇ひ入れやうとして爭つてゐるのはどこも同じらしいですね」

田上「私はいろいろな用事で職業婦人のをる店等に行きますが、物の言ひやう等、まるで甘え切つて鼻聲出してゐるのは、妾のやうな調子ですね」

村上「男の社員は、社長や重役の前へ行つて戰々恟々としてかしこまつてゐるのに、女事務員が、却つて圖々しく重役室へ入つて談笑してゐるのは珍らしくありません。私の知つてゐるある保險會社に一人の美人がゐて、常に重役と自動車に同乘しては乘り廻してゐたが、その人等は、月給を貰ふと其の日の內に、全部を身の飾りにかへて仕舞ふと云ふ樣子でした。兎も角雇主の氣持は、女を雇ふのは第一が看板、第二が給料が廉い、第三が享樂の相手にする爲めです」

奧「でも、それはその人の心の持ち方で充分ふん張る事も出來る筈でせう。タイピストの〇〇さんなんか、よくさういふ事實を話してゐますよ。同じ重役の下に使はれてゐても、その人の心の締め方一つでね」

山田「こびを賣らねば勤まらなんて、本當に情ないね」
村上「男の頭が、女さへ見れば賣笑婦のやうに思ふ考へが癌です」
長島「一般の男が、娼婦では物足らなくなつて、話相手にもなる樣な職業婦人に移つて來たのではないでせうか」
山田「昔の娼妓は、宮中にゐたものや敎養のある浪人の娘等が、親を助けるにはこれより他に女に開かれた金を得る道がなかつたから、止むを得ずなつた爲に、遊藝もあれば、見識も高かつたから、當時の敎養ある男子の相手になれたのでせう」
長島「ある東北の遊廓の調査では、娼婦の敎育程度は、尋常二年から三年程度だつたさうです」
山用「そこへ行くと、高女卒業の多い女事務員が、敎養ある男の相手になりかけるのも當然ですね」
奧「さあ、敎養ある男子といふと、をかしくなるやうですね。一瞥て男子をみると」
山田「近頃若い女も、平氣でカフエーに男と連れ立つて入るやうではありませんか」
奧「それは無邪氣にやつてゐるなら、自由にやつていゝとやありませんか」
小澤「私もさう思ひますわ。美しい戀愛を、はたの者が目のかたきのやうに押しつぶすのは惡いと思ひます」
梅山「然し、女の方は割合に無邪氣にやつてゐるのが、多いんですが、それを男が誘惑をして、ついずるずると、惡い方面に引きずり込んしまふのが餘程あるやうです」
山田「然し、共同生活をしてゐる以上、二人の戀が執務の上にまで妨げを來す時には、多少注意されても仕方がないと思ひます。その方法に怜悧さがないと、どんなに美しい戀愛でも批難を受けます」
村上「私の知つてゐる會社に、仲のよい者は重役に申込むと、仲に立つて夫婦にして呉れる所があります。然し他の人に影響しますから、夫婦になつて一緒に勤めることは禁じてゐますが、この位は仕方がないと思ひます」
伊藤「ソコで、一體職業婦人の墮落の原因は、何處にあるのでせうか」
村上「私は男もすることは女もすると云ふやうな氣分が、女に出て來たのじやないかと思ふ」
山田「理窟ぬきに刹那的の享樂にふけるのですね」

奥「或る人の話では、勤めから歸つて來ても暖かいホームを持たないやうな、獨身で他人の家に間借りをしてゐるやうな女が、餘計に墮落をしてゐると云ひますが、一般的にみて、自分の家から通ふものとさうでないものと、どちらが餘計に墮落してゐるのでせうか」

村上「今度の事件の女は家から通ふてゐましたはね」

梅山「自分の收入を全部自分で勝手に使ふ樣な親がかりの女の方が、反つて誘惑におちいり易いとも考へられます」

長島「男女共學では風紀が紊れる、と云ふことが女學生聯盟に對する文部省の對度ださうですが、この問題と關聯して何う考へ可きでせうか」

山田「男女共學にしたらば、もつと日本の男が女に對する尊敬特に貞操を尊とぶやうになりませう　何うしたつて、先程からの論では、この問題を解決するには男をもつと高めるより他にない。然し男を高めてゆくのと、女自らが高まつてゆくのと、何ちらが早いかが問題です」

村上「强いもの勝ちの男に對して、女はいつも犧牲的で、何うしても個人主義になれぬこの氣持から出發して、男を高めてゆくより仕方がありません」

山田「さうすると母親の自覺ですね」

田上「男女共學にまさる男の改造はありますまい」

山田「物の判つた母親は、この頃男の子に妹の手を引かして學校へやるやうにしてゐるが、あゝして女を尊敬するやうに母親が敎育して行つたらば、男が再び女を賣笑視するやうな氣分はなくなつてゆく事だと思ひます。然し私達女性は、一面さう云ふ改造運動を着々始めると共に、今職業に就いてゐる方々は、自分の立場をしつかり握つて、賣笑視して來る男に赤恥じをかゝすだけの威嚴を、心の底にしつかりと抱いて行き度いものですね」

—終り—

▲合同中止▼

都合に依り勞働部との合同を中止しました『婦人と勞働』は從前通りわが社より發行いたします。

『同情週間』

貧乏人にも
同じ年頃の娘が澤山居る
さぞ御身らの着物や襟巻や
髪飾りらを
ほしがつたことであらう

——歳末所見——



現代の新しい女とは？

近松秋江、久米正雄、田山花袋、廣津和郎
宇野浩二、中村武羅夫、千葉龜雄 の諸氏

近松。どういふ女が一番アツトラクチーブなのかね。

久米。廣津君の『三年』に現れたやうなのが、まア新しい女だね。

宇野。僕は新しい女とは思はないね。新しく見える女で、しかし僕はあんな女は好きだけれども……

久米。あゝいふ風の、風馬牛の……ちよつと何と言つて宜いか、あの小說を讀んで見れば分る通り、あゝいふ風な自由といふかコダワラない女と言つたら宜いかね何か知ら…

宇野。兎角、良い女で僕も好きなんだけれども……

近松。職業婦人といふ一つの型があるね。

久米。新しきもの、必ずしも職業婦人ではないですね。一般にどうも……

田山。隨分變つて行く何が早いですな。僕等は二三年前までは隨分先頭に立つたものですが……。

廣津。田山さんの『彼女』なんか隨分新しいですね。

田山。何かもう少し新しい所を、作者の側としては。

廣津。結局あの程度ぢやないですか、みんなに解つてゐるのは。

田山。作者としては、現代に住んでゐる人物の中に入つて書くといふのが、一番忠實だと思ふね。一つの社會といふものを書いても、若い女といふものが出て來なくちや詰らない。

廣津。ほんたうの新しい女の萌芽といふものは、確かにあるが、併し實際もう僕等にだつて分らないね。（久米氏に向つて）君などは始終いろんな者に觸れて行くことが僕なんかより餘ほど多いから、いくらか解るだらうが。

山田。分ることは少し分る。後も先も分らないけれども、（指にて形を示す）この位の現在のことが分る。それで宜いと思ふ。

中村。新時代の女といふのは。分類的に言へば結局女學生になるのですかね。

廣津。女學生なんか新時代的と言ふより、矢張ブルジョア的だらうね。

中村。それなら職業婦人などですか。

田山。職業婦人の樣な者は當時の流行を追うてゐるのだから、矢張新しい氣分はある譯ですな。女學生でもブルジョアであつても……

廣津。さつき僕に丸ビルの女について語れといふ意見であつたが、僕は、丸ビルの女と言ふても、日に一二度エレベーターで見かけると云ふ程度だから、よくは解らないな。

久米。詰り自由で悧巧な女が殖えて來て居る譯だね。

田山。吾々が若い時に見た時の女とまるで違つて來た。

近松。悧巧な女と云ふのは適評ですね。悧巧な女といふものはこの意味から、經濟的に獨立するといふやうな意志を有つて居り、又それに適應して行かうといふ女ですね。

中村。併しそういふ自覺から、丸ビル婦人

になつて居るさいふのは少いぢやないですか。

近松。丸ビルに居らうさも或は日本橋の西川に居らうさも、同じぢやないですか。それさも違つてゐますか。

中村。それは「丸ビル婦人」さ、さういふ階級の婦人を代表させて一口に言つて居るのでせう。職業婦人さいふものは、皆はつきりした經濟的自覺から職業を得て居るさいふより、前から家で内職にハンケチの縫さりさか、狀袋を貼るとかいふのが、女に月給が取れるさいふので通ふのが多いぢやないですか。

田山。それはそうだけれども、家に居て内職するのと違つて、外へ出れば大勢の人にも逢ひもし又新しい空氣にも觸れる。男の勤人さ同じやうなことをやり、男に出會ふ機會が多いし、其處に一種の新しい女といふ型みたいなものが出來て來るのではないか。

中村。僕はやつぱり、新時代の女といふのは、女學生、知識階級、女子大學の學生などだと思ふ。

田山。平塚雷鳥といつたやうな、さういふ意味から言へば、さうなるけれども……

中村。詰り一つの新時代タイプといふやうなことから言へば、職業婦人なんかも。

久米。新しい風俗を持つた女といふ意味ですな。それは矢張著しく文藝の浸潤を受けて……病的に文藝の浸潤を受けて居る所だけでも大分違ふ所もあるだらう。

千葉。矢張丸ビル邊りでも精神的の感化が全くないとは言へない。電車の中で讀んで居るのを見てもさうです。矢張境遇に生きるさしても、さういふ心理が響いて居るのぢやないですか。

松近。併し加藤武雄君のものを讀む位のものですね。

田山。それは女の雜誌が低級であるのを見ても分るが、兎に角色々な空氣が出て來て、色々な感じは出て來るには違ひない。それに、自由になつて來て居るでせう、どうしてもね。それからあれはどうですか女の操なんさいふ考方といふものは非常に自由になつて、さうして非常に惡くなつてフシダラになつて來た形があるのではないか、さういふことは僕には分らないけれども……

久米。それはありますね。だがそれが昔のやうに意識的デカダンの氣持になつて居るのでなくて貞操觀念といふものが自ら變つて、只の女大學式の空文にちつとも累らはされて居る所がない。昔は所謂貞操觀念に反抗したデカダンといふものがあつたでせう。强て意識的に反抗したが今のそれは意識せず自然に解き放たれてゐて、さういふ風な外面は同じでも、而かもさうでないといふ形式を採つたので……

田山。眞劍といふ所が……。

久米。眞劍といふことでもない。詰り何んさいふか……

廣津。何でもないのだ。

久米。さうだ、何でもないのだ。眞劍さ積極的に言ふよりだね、さうい境地に囚はれないで唯それが彼の女に取つて行當りばつたり……と云へば惡い言葉ですけれども、良い意味での行當りばつたりです貞操觀念の考方といふものは、それは新しいものですよ。今の青年子女は……

――新潮――

街上鬱想

目次緋紗子

激しい暗闘と動亂
慘めな妥協と忍從に
その一日を終へ
さん〴〵にさいなまれた頭腦と
痲痺した官能をひきずつて
暗夜の空高く聳え立つ豪壯なる建物から
はき出される時

上氣した頰にほつとする宵闇の冷氣
燦爛ときらめく華かな都會の街上を
疾走する自動車、電車の響音に
おびやかされて
たど〴〵と立ち寄る飾窓に
うつる蒼褪めたその顔。

どよめく群集の中を泳いで
觸れ合ふ袖に
燃え上る青春の情熱は翼をひそめ
爛熟の情慾はそつとその姿を忍ばせ
只徒らに通り過ぎるその時。

何時か本然の姿はかき消されて
寂しい殘されて行く慘めな影
この華かな享樂と
歡樂のさんざめきの
都會の夜の街上を
憂鬱にとざされた心を
二ツの袖に抱きしめて
なほどよめく
群集の中を泳ぐ。

屋根の上と屋根の下

生方敏郎



（畫）

—屋根の上。—

ぴい子　おや、チウ助さんなの。

チウ助　うん。さうさ。何もそんなにビツクラしなくもいいよ。僕がそばへ來た位。

ぴい子　それや、あなたと分れば何も驚きやしないことよ私、背ら羽搏の音が不意に聞えたから、鳶か鷹でも來たのじやないかしらと思つて、ぞつとしたのよ。

チウ助　あは、はは、ははは……ぴい子さんの氣の弱いにも程があつたもんだ。僕の様な微妙な輕快な羽音とあのクソ鷹やドロボウ鳶の奴のやうなバタ〳〵いふ殺風景な羽音と聞きちがへるとは、こりやまた何うしたものですね。

ぴい子　私、なにも聞きちがへしませんわ。ただ、あなたが餘りあはてゝ飛んでらしつたから、若しや鳶にでも追はれたのぢやないかと思つただけなのよ。

チウ助　ああ、さうでしたか。なあにね、たとへ彼奴等に追はれたとても、何も決して恐れるにはあたりませんよ。僕等は體の小さいのを利用して、何でもそこらの狭い隙間でも穴でも見付けて、一寸の間避難すりや、彼奴等はづうたいが大きいから、そとは可愛さうなもので　好い餌を前に見ながら、入ることも何うすることも出來ずに、すごす

ご大空へ舞ひ戻るやつさ。それに我々のやうに大都會に住んでゐると、彼奴等が我々を長追して地面に下りた日には地面には人間もゐりや猫もゐりや犬もゐる。鷲や鷹ばかりの天下ぢやなしさ。併し、そんな事より何より、此頃は餌が拂底してゐて困難するねえ。

ぴい子　そうよ。私もそれで困つてゐるところなの。

チウ助　木にもろ〳〵虫もゐやがらねえし、地びた見たつて滅多に米粒なんか落ちやゐない。もう近頃は一年々々不景氣になるばかしだ。ぴい子さんなんかは知るまいが、以前には烏の勘左衛門の一族なんかは東京の空に群を成してゐたもので、夕方にでもならうものなら森の塒へ急ぐ其騒つたらなかつたもんだ。だからこそ、明烏だの月夜烏だのと歌の文句にもよくあるし、人間の子供らまで「後の烏先になれ」などとはやしたてたもんだ。それがこの頃ぢや市内に殆んど影も形も見えない。それと云ふのも食物が無く成つたからのことさ。蝙蝠もこの頃は夕方になつても街へ出て來なからう。僕たちの仲間だつてずいぶん減つてるぜ以前には鳥さして奴が長い黐竿を持つて町をのそり〳〵歩いてやがつて、油斷もすきもならなかつたもんだ。彼奴等どもにさされた僕たちの仲間は、雜司ケ谷名物にされて一羽一錢の燒雀として賣られたのだが、此頃ぢやあんまり雀が減つたので、鳥さしなんか商賣にや成らないと見える。だが、減つたと云ふのも不景氣のためで、餘り結構なことぢやないさ。

ぴい子　私もね、この寒空に、坊やたちを養はなけやりならないのに、恁う餌が見つからないぢや、本當に何うしやうかと思つてるのよ。

チウ助　けれど、あなたのところぢや、れこと共稼ぎなんだから、いいよ。何うしたつて、拾ひ高は大きいや。どれ〳〵、僕等獨身者は氣樂とは云ひ乍ら、恁うして無駄喋りをしてもゐられねえ。

ぴい子　そうですとも。さあ、私も、もつと拾ひ歩かないでは。

――屋根の下。――

差配　今日は。

奥さん　おや。いらしやい。ですが、今日は丁度あいにくと主人が留守をいたしまして。

差配　へえ、今日もおるすですか。何だか何時來てもお宅

の御主人は御留守ですわねえ。えへへへ。大分お家賃がたまりましたんで、今月は何うかキレイにして頂きたいと思つて上りましたんですが、わづかばかりの物でいつ迄も帳簿の整理が付きませんと、私共が困りますから。

奥さん　本當にお氣の毒ですのね。宅で歸りましたら、又よく申し聞けて置きますから。

（差配澁々歸り行く。引きちがへて伊勢崎銘仙の行商人、荷を負つて入り來る）

行商人　今日は。奥さん。大變御ぶさた致しました。

奥さん　あら。銘仙屋さん。今度は用はないことよ。

行商人　そりや、あんまり可愛相ですなあ。わざ〳〵恁うして重い荷を背負つて參つたんですよ。丁度奥さまのごふだん着に大變いい柄がございましたものですから、持つて上りました。お値段も至極お恰好でございますが。

（銘仙屋は大きな風呂敷の包の荷を緣側へおろしかける）

奥さん　ダメよ。今日はとても忙しくつて、そんなものを見てはゐられないから。

行商人　では四五反置いて參りませうから、お手あきの時に見て置いて下さいませ。

奥さん　今年の暮は、とてもそんな餘裕はないのよ。あなたもそんなに無理に押賣りしても、若し拂ひがおくらされたら、後悔するでせう。

行商人　いえ、少々お拂ひが後れましても構ひませんです私どもも、恁うしてただ荷を持つてゐましても仕方がありませんから。

奥さん　今年はあなたたちも不景氣？

行商人　へい、いえ、でも、私共の方は御普段着ですから上物の樣に賣れない事はござんせん。併し、多少不景氣が利いとりますなあ。しかしお宅のやうな全く當にしきつて參りました先まで御注文が頂けませんと、本當に大番狂はせでございまして、大に悲觀いたします。まあ、私どもみたいに恁うしてぐる〳〵廻つて歩いて、何うか恁うか商賣に成ると思ふと、不思議な樣なもので、考へて見ると、誠に果敢(はか)ない稼業でございますよ。

奥さん　それや、誰だつて同じだわ。家みたいに官吏なんて月々きまつた收入があるから安全の樣に見えてるけれど今度の政府でやるやうな經費節減に合ふと、いつ首(くび)になるか知れやしないもの。

行商人　へへへ、何う仕りまして、お宅の旦那さまなんかは、たとへ何んな事がありましても、御心配は御無用でございます。

奥さん　さうでもないわ。何うも今度こそダメらしいのよ勅任官の人さへやられる位なんだから。それを思ふと、私も前から何か稽古して置いたら、こんな時まごつきやしないのに。と考へてるのですの。ミシンとかタイプライタアとか、今ぢや女に出來る職業は世間にいくらでも有るんですもの。私、これまで女髪結なんて輕蔑したのは間ちがつてゐたと、つくづく思ふわ。何んな仕事をしたつて、人間は自分の働きで自分を養つて行けさへすれば、安心ですものね。女だつて手も足も有るのに、主人ばかりを頼りにして家庭の中の人形になつて治まつてゐたのは、全くよくない事だつたわ。

（奥さんのこの話の間に、行商人は先刻出した反物を風呂敷に包み込み）

行商人　ではまた奥さまの御都合のよい時參ります。春に成りますと、もつと爲によい樣なお品が出來ます。これは或はあんまりおすすめ出來ない品なのでございます。

（行商人、逃げるやうにして出て行く）

（夜）

――屋根の上。――

のら猫　うう、おお、うう、おおん。

雌猫　うう、うう、にやおん。うう。

のら猫　みい子さん。本當に僕の胸中を察してくれ玉へ。僕は貴女故に、もう昨日から家へも歸らず、飲まず食はずで、この樣に憧憬れて此家の周圍をぐるぐるしてゐるんです。僕の胸は張り裂けるほどです。あなたは僕の悩みです僕の命です。僕の救ひです。

雌猫　あら、さう、そんなに悩ませてはお氣の毒だわね。

のら猫　だから、僕を救つて下さい。あなたの眼には僕が此通り痩せてるのが、見えないのですか。

雌猫　そりや見えてよ。あなた幾日も御飯を上らないのでせう。あなたは御主人に解雇されたのでせう。お可愛相に此寒い年末だといふのに、馘になつちやつたのでせう。

のら猫　さうです。併し、それも誰ゆへです。ただあたたの戀しさに、幾夜も家をあけた罰なのです。しかし、今度

で僕はつく〴〵すまじきものは宮仕へだと感じました。僕は僕のライフのベストパートを主人の爲に提供して惜まなかつたなのですよ。僕が最初奴隷として彼の家に貰はれて行つた時、家の中は何んなだつたと思ひます。天井の上も壁の中も鼠の巣ばかりだつたのです。

雌猫　そりや、ずいぶんよかつたわね。御馳走が多くつて

のら猫　ええ、御馳走てば御馳走でもありませうが、僕はそれを主人の爲に、こと〴〵く退治してやつたのです。或時は危險を賭して天井の梁へ登り、或時は又、汚ない流し尻の孔を潜りなどしまして。然るにまあ何うです。少し怠けたと云ふので、もう解雇されてしまひました。それも何の爲です。まつたく戀ゆへです。家の主人が若し戀愛の如何に神聖なものなるかを少しでも理解してくれたなら、こんなバカバカしい對度には出ない筈です。でなければ、彼は嫉妬やきなのですね。

雌猫　さうかも知れないわ。大方妬き手なのよ。人間は女がわづか二人や三人の良人を持つことすら、社會から許されてないんだ相ですから。

のら猫　そんな不自由な社會に住んでは生甲斐はあるまいことにあなた見たいな發展家だつたら、とても無事には治まりますまいよ。

雌猫　ええ、だから私人間になんかは生れなかつたのだわ

（此對話の間に隣家の屋根に白黑の班猫姿を現はし、しばらくこちらを見て樣子をうかがつてゐる。そしてだんだん近づいて來た）

ぶち猫　うう、ううう。ごろん、にやあん。ううつ。ぶうつ。

（ぶち猫、背中を高くする。のら猫も同じく背中を高くし、身構する）

ぶち猫　何處の青びようたんだ。この野良野郎。

雌猫、ご挨拶だわね。この猫、私の意中の猫よ。二丁目の色男だわ。

ぶち猫　やかましい。この淫婦猫め。俺が一寸油斷するともうこんな若いのを見つけやがる。

雌猫　大きに御世話さま。私や、なにも、貴郎に養はれてやしまいし。誰と何處で何しようと、私の自由だわ。お前さんこそ、なんだ。私に子供を押付けたきりで、あれ以來私のところへは絶對に寄りつかず、自分の子供の顏を見や

うともしやがらない。この薄情野郎のロクでなしめ。私が一度に五疋も子供を生んで、毎日乳首の痛むほど乳を吸はれてゐることを思へば、たまには魚の一きれ位、何處ぞで盜んで御見舞に持つて來られ相なものだ。それに較べると此ののらチヤンの情の深いこと。私は本當に可愛ゆく成つちやつたわ。

（この暗い瓦の上にて、三疋互に嗅ぎ合ひ睨み合ひ呻り合つて、ぐるぐる巴形に廻つた後、トドのら猫と雌猫と一緒に成つたがギヤツト雌猫が鳴くと同時に、この二疋だけ屋根からころころと松の樹の根元までころがり落ちる。斑猫だけ屋根の上に取り殘されて）

ぶち猫　ニヤアんだ。つまらねえ。

――屋根の下。――

藝者こんやのウ藝者アはア山猫ヲ育ち、魚ア手づウかアみイ　皿アなアめエるウ

客　あ、コリヤ〳〵イ、

藝妓　ハ、都々逸ア御順だ。お次の番だよ。ペコ〳〵ペコシヤン。

幇間　お客の鼻の下。何の位。
ちよいとメートル尺で測量すりや、
はア三千三百三十三ミリ、
ゆだれの長さは、まだ長い。

客　あ、ストトン〳〵〳〵。やい、藝者、踊れ〳〵

藝妓　踊りますよ。何でも。

客　雨しよぼを踊れ。

藝者　雨しよぼなんて、こんなお婆さんの雨しよぼは汚らしくつてダメよう。

客　雨しよぼ、雨しよぼ。

幇間　だまつてエ。させエとウきや。

藝者　ようよう。ペコ、シヤン。ペコペコシヤンシヤン。

幇間　へそ迄エ濡らアす、あら、大變よう。

客　何うした、何うした。

幇間　かあいイ坊やのウ水遊びイ。

藝妓　ほんとうに、坊つてば、子供は可愛いわねえ。

客　ほしいか。

藝妓　ほしいわ。私人形見たいな女の兒を一人くらゐ。

客　ほしけりや、我輩が授けてやらう。少しも遠慮には及ばねぞ。

藝妓　そんな事をしたら、奥さんに怨まれちやうわ。

客　恐つたつて何だい。女房くらゐ。怖い顔したつてたかが、女房也。なあんだい。

藝妓　私しみじみ日本の奥さんたちに同情するわ。男なんて、あんまり勝手なんですもの。

客　其儀ならば、我輩も同感だ。經濟的獨立を持たない日本の婦人は、たとへ綺羅錦繍をまとひつつ金殿玉楼に棲むといへどもぢや。ヘツ、ヘツ、ううい、其身は美しき奴隷に過ぎず……………

幇間　謹聽、〳〵。

客　さあ、子供を授かるのがいやなら酒を飲め。

藝妓　のむわ。

（幇間酒をつぐ）

藝妓　散ります。散ります。オツトツト。

客　散るなら大きい物で飲め。此盃洗で飲め。飲まぬと承知せんぞ。

藝妓　いやですよう。しつつこい。人權蹂躪だわ。

客　金で買はれた身であり乍ら、客に服從せん女は、たしかに金權蹂躙だ。こりや人權蹂躙よりは罰が重いぞ。

ああはハハ…………

幇間　えへへへへへ…………

藝妓　おほほほ…………

（終り）

◉土の臭ひ◉

（詩歌以外）

山崎嶮路

「馬でも、蹴りとばすべえか」

と、太息つく夫の節くれた指先を、ショボ、ショボと見詰めて居る女あり。内職の竹行李編む手休めて。

この女去年の暮れに、産むだ赤子に、くれる乳が出ぬとて、いつも米の粉を湯にとかして飲ませるのだと鼻を啜る。

◇　　　◇

メロ、メロと立つ煙を指して、「ありや何んすら」

と伍作爺が聞けば、籔越しに見ゆる黒い煙の影を見て、

「ありや、ほれ、儂作がとこの娘はあ、あの娘つ子が紡績工塲から肺病背負つて來て、死んだ堀立て小屋を燃やすすらあよ」

と答えて、ポンと烟管を鍬の柄に叩きつけた男あり。夜盲目だと言はれる男たり。

◇　　　◇

「白魚の様な美しい指、その指一本の爲には、働らく女が千人位、指を午蒡の様にして苦しまなければならないのだ」

と聞かせても、その意味が呑込めずに、ただキョトンとして居る田舎娘あり。ヒビだらけの手を袖の下にかくして。

「子宮」と「勞役」と「盲從」とが貧しい女の總てだ。富んだ女は、指輪の穴から一生拔け得ない黄金の鎖は、女の肉体を「共有」にする、「私有財産」にする。

女は人間では無いのだ。今の世では、

◇　◇

鼻たかだかと、チリメンの衣類縫ふ町の娘を、「消防隊」と村の娘等は呼ぶ。

それは「火のし」の炭火を、ただ使ひ消すだけで、少しもおこさないからだと。

町外れの和服裁縫私塾で若い娘達が、町と村とに別れて睨み合ふ。

◇　◇

十三年の間、むくはれぬ戀を抱いて、冷たい小作田を耕す男、道ゆく美しい「妾」を見て、ただ拳を握る。

◇　◇

安料理屋の女中を中心に、乘合自動車の運轉手と、町長の椅子にフンゾル地主とが、決闘をした。その渦卷に引き込まれて、一人の若い巡査と、子供の多い部長とが首になつた。地主の亡き父も昔し小作人の竹槍・莚旗に燃え上つたことが有るとか。朽木の如き土の臭かな。

職業婦人界音信

◇看護婦志願激増　十一月九日府立第一中學校で行はれた今年秋季に於ける警視廳施行看護婦試驗の希望者は千三四百名に達した。近來志望者は益々激増の傾向である

◇

丸ビル婦人改造運動　丸の内ビユルデイングにあつて婦人に關係せる事業主は、最近丸ビル婦人の評判が惡いので、之が改造を目標として『丸の内職業婦人聯盟』を組織する準備中。

◇

ガイド試驗合格者　外人案内者の試驗に二名の婦人が美事に合格した。濱田きみの（三六）高橋英子（二五）の二名で何れも津田英學塾出身。

◇

女教員懇談會　十月二十五日東京市教員會女子部では、麹町區の番町小學校に於て懇談會を開き帆足理一郎氏の「戀愛談」を聽いた。

◇

保育者會發會式　同日同場所に於て市立の幼稚園保姆五十有餘名は、市の藤井學務課長の肝入りで東京保育者會の發會式を擧げた。

◇

婦人に職を男子に返せの聲　男子の失業者續出するに及び、職業紹介所に現はる男子の求職者の間に失業難なき女子に對して『男に職を讓れ』の聲が、日本に於て始めて聞かるゝに至つた。

◇

市設授産場新設　東京市參事會は、五ヶ年連續として經費十七万五千圓を以つて勞働婦人向きの婦人授産場五ヶ所を設置することを可決した。

◇

百六名の新女醫　東京女子專門學校では十月三十日百六名の卒業生の證書授與式を擧げた。この百六名の卒業生は女醫の資格がある譯で、中には二十一歳と云ふ若い女醫も尠くない。

◇

婦人の高等學校に教授　元鐵道省技師高橋豐次郎氏の長女陽子（二五）さんは昨秋擧行の高等學校及高等科教員檢定試驗に佛語の資格を得た婦人で、最初の資格合格者である。

◇

立志傳中の女運轉手　群馬縣から飛び出て、本所外手町の愛國婦人會の隣保館の世話で自動車の見習をしてゐた近藤久子（二一）は、僅か一月の見習で美事に警視廳の運轉手試驗に合格して世間を驚かした。

◇

勞働部の基金募集　東京聯合婦人會勞働部では、大正十四年度の新事業の爲一万三千圓の寄附金募集運動に着手した。

◇

出札係の名札を除ける、沼津以東白河までの鐵道各驛の婦人の出札係の所に掲げられてあつた名札は、男子の誘惑に惡用さる憂があるので十一月より一齊に撤回した。

◇

兵頭女史の飛行大會　津田沼の伊藤飛行場で出た花形飛行家兵頭靜子女史は、今春

三月立川町日本飛行學校で飛行大會を催ふす趣を發表した。

◇

鐵道事務員袴つける事　職業婦人のおしやれの本家丸ビル女の惡化で、東京鐵道局の百二十名の事務員が丸ビル型に感染して來るので、今回一齊に袴をつけることを强請された。

◇

圖書館洋書係長生る。　津田英學塾出で紐育のプラットインスチユート圖書館學校を卒業した加藤花子さん(三〇)は、帝大の圖書館の洋書係長に任ぜられた。婦人の圖書館從業員としてこの重要な位置を得たのはこれが嚆矢である。

◇

婦人授產場新設　牛込若松町の陸海軍將校婦人會では陸海軍人夫人の生計の一助に婦人授產場を開き、專ら蚊帳縫ひ及和服裁縫を以つて工賃を支拂ふ事になつた。

◇

高等看護婦卒業式　十一月十四日築地聖路加病院附屬の高等看護婦學校は第二回の卒業證書授與式を行ふた。卒業生拾名。

◇

米國の醫師試驗に合格　井出ひろ子女史(二七)は米國オリンピヤ州の醫師試驗に合格し、シヤトルで開業した。

◇

電車に女車掌　市街自動車に女車掌を採用する事になつた電氣局では、乘客の氣持を柔げるため今年五月より市內電車に約五百名の女車掌を使用する事に決定した。

◇

職業婦人の生活調査　大阪市の社會局では市內の六大百貨店の女店員を始め全市の職業婦人の生活調査を開始した。

◇

機械製圖工　築地の府立工藝學校から、始めて機械の婦人製圖手が拾名養成されたこの方面の製圖工は有望なので、今春四月再び募集するさうである。

◇

女車掌のよりが惡い　四百名の女車掌を募集の所、初給五拾圓といふ割のよい給料なのに集まりは極めて惡るく僅か百八十人しか採用し得なかつた。

◇

丸ビルの不良職業婦人の檢擧　不良少女風紀紊亂の聲は等しく丸ビルに働らくおしやれ女の上にあがつた、果して淫蕩な女が警察の手によつて檢擧され、それが爲に心ある雇傭者は嚴重に女使用人を監督するやうになつた。

(四〇頁より續く)　の遺書が、はしなくも發見された。それによると父親はトイヮニングの息子のハロルドである事が判つた、この時許りは溫厚篤實なセイパーも、怒氣滿面に溢ふれ憤然としてトヮイニングの家を訪れた、所がこゝにも亦息子ハロルドの戰死の報は接して悲歎の淚に暮れてゐたので、今は張りつめた氣持も失せ茫然として家を去つた、其の後セイパーは長い間病床にあつて生死の境を彷徨ふたが一切の周圍の事情は明るくなつて、正に「冬去りて春來る」と云ふ明るい希望と光明の前途を想ひ、溫いノナの看護の腕に抱かれて安らかに微笑を湛へてゐるのであつた。

この心

土屋ならえ

病みてわが生命(いのち)の清さ尊とさを心の底にしみじみと聴く

胸のいたみ少しおちいて夢に入るゆふべ心のかろかりし哉

何といふ名のつけがたき物一つ心にありてさびしなやまし

別れ來し物足りなさとさびしさと似たる心や物の戀しき

狂亂のすがたのはてに似通(にかよ)ひしこの頃のわれおくところなき

生と死の境に立ちてなほ生の光は明(あか)くわれにせまれり

或時の思のはてはみちたらぬ心を火山になげもみまほし

君にそむき吾兄(あこ)にもそむきゆくところ天地のそとにありとは見えね

廣々き沙漠のはてに只一人立ちたるわれをこのごろにみる

よべの夢奇しくおそろし高原を火車ひきて君とわれ行く

苦しみの眞山(まなか)に立ちて生くるまで生きてみんとてわれあへぎゐぬ

わが歌

國原泰子

しみじみと我はきき居つ母のみの母の逮夜を經よみ居ます

この日はも誰の忌日かわが母の心をこめて經を誦みます

青竹の撓める枝にきり雨は雫となりて並び光れり

電燈の下に讀み居し書ふせて命深しとなげかひにけり

つゝしみて目守る寂しさ今宵わが思ひに立ちくる亡き人達を

冬枯れて立てる楓の枝ごとに雫たもてり雨のあがりて

梅の木の梢に苔ふくめるを朝日の照に今朝見出いでつも

人見えぬひろき干潟にたゞずみて浪のどよみをききてゐにけり

わが庭の木影は暗くなりにけりみ空に大き星の瞬く

わが命生きむと思ふゆゆしさやふたたび大地ふるふ日あらむ

映畫物語

「冬來りなば」

"IF WINTER COMES"

物語は、歐米に三百萬の愛讀者を得たといふエー・エス・エム、ハッチソン氏の小說「冬來りなば」今度フックス社の手に依つて、名監督ハリー・ミラード氏と、性格俳優パシー・マーモント氏の主演で映畫になつて日本に來ました。原作れ有名なるよりも映畫となつた「冬來りなば」は全米の男女の靈に對して『これ程立派な珠のやうな映畫はない』とまで感動を與へました。濁り多い世の中に、微笑を以つて運命と闘ふてゆく、本篇の主人公の眞劔と純眞さは、又私達の心の糧になります。この題名は英國の詩人シエリー氏の「オ、風よ冬來りなば春遠からじ」と云ふ所から出てゐます。

◇　◇　◇　◇　◇　◇　◇　◇

その梗概

本篇の主人公マークセイバーは、世界大戰の始まる前、妻タイベルとロンドンから程遠からぬ小さな町ペニイグリーンに住んでゐた。彼は數會や學校に用具を納めるフォーチェンイーストセイバー商店の社員であつた。彼の父は、嘗てこの商店の代表社員であつた關係から、やがて彼がその位置に昇級するものと、土地の人達は彼の將來を囑目してゐた。然し實際の權力は土地の數會の牧師セバスティアン、フォチュン氏が之を握り、イーストの名義を代表する子孫は既に死に斷へてゐた。その代りに、入社して工場の管理をしてゐたものはトワイニングと云ふ男、セイバーとは何もかも異つて現代的な才子であつた、

セイバーは自分の事業として別に數科書の編纂に非常に深い趣味を抱いてゐた。然かも彼の性質は、全く類のない程純眞で、ユーモアーに富み何處となく幻影的な詩的趣味を多分に惠まれてゐた。かうした性格の持主である彼は、外では商店の社員との折合が思はしからず、家庭 あつても、妻メイベルと本當に調和し得なかつた。それは、彼が惡いのでなく、社員や妻が、餘りに物事を淺く見て、世間を渡つてゆく氣持と合はぬ爲であつた。

妻のメイベルは極くコセ〳〵して、その上愚かしい程嫉妬深く、短氣な性質で、河邊の麗はしく咲くローズの花を見ても、彼の女の眼には唯單にローズの花としか見えない程、想像力と詩想に乏しい婦人であつた。隨つて二人は、何かにつけて共鳴することが出來なかつた。例へば、妻のメーベルの眼には下らない人間だと輕視してゐる人から、セイパーは隱れたる人生の心の糧を得る事が出來た。老嬢に孝養を盡すパーチと云ふ青年に對して彼がひそかに尊敬を拂ふてゐたこと等は、妻よとつては馬鹿らしい事に過ぎなかつた。

セーバーにも、結婚前に戀してゐた小鳥のやうな娘があつた、それは今タイパー卿の夫人として時めいてゐるノナ夫人であつたが、運命はたま〳〵二人を皮肉にも近づける機會を作つた。ある日タイパー卿は所

用の序に夫妻同伴で彼の商店に訪れた。タイパー卿と云ふのは如何にも貴族らしい典型的な人物で、物事に無頓着な、そして人を喰ふやうな皮肉家であつた。表面華やかなノナの結婚が、實は寂しい滿たされぬものであること、セイパーは其後二三度出入するノナの唇から聞かされて、彼の女の爲に悲しんだ。折も折、彼はトヮイニングの入社以來、彼の勢力にやゝともすればとされ勝ちで自分の位置が不安に感じられるので、敎科書の編纂事業を始め度いことをノナに漏すと、夫人はその企てに心から賛成して吳れた。

かうした二の人近づきは、感じ易いノナの心を動かし始めた。メイパー夫妻がスコットランド地方へ旅行した時にも、ノナは頻りに、セイパーよりの便りを望んだが、彼女を心に夢見ながら、一度も返事をやらなたつた。否却つて、彼は一度正式に結婚した以上、どんなに欠点を見出しても、お互が愛して行くのが夫婦の義務だと感じて、妻のメイベルと理解する爲にあらゆる努力を拂ふた。然し彼の努力の結果は反對になつて、嫉が上に妻をイラ立たせるに過ぎなかつた。

暫くしてノナは旅から歸つて來た。そして、夫タイパーの不實の數々を並べて、セイパーに抱く抑へ難い戀を恥しながら打ち開けたのであつた。セイパーさても彼の女は初戀人であるだけに、心深く愛して居たが「私のとる可き道でない」と苦しみながら強く斷つた。



寫眞は、マークセーパーに扮する名優パーシーマーモント氏、相役タイパー卿夫人ノナに扮するアンフレスト孃

この時欧洲の天地は暗澹として、風雲の急を告げて來た、何處へ行つても戰爭の噂に、全英國民の血は湧いた。然しセイパーは何事によらず表裏兩面から物事を感察する性質なので、無闇と騒いでゐる社員とは「戰爭」に對する意見が違ふた。こんな事で、他の社員とは益々仲が惡くなる許りで、殊にトヮイニングの息子のハロルドが入社した時には、自分を邪魔者にするのではないかと取越苦勞をして深く悲しんだ。

かうして面白へない日を送つてゐるセイパーに對して、家庭の不和合から、ノナは益々彼に接近し、手紙を送つて共に他國へ逃れやうとまで言ひ寄つたが、彼の性質は之を受け入れるに餘りに純潔であつた。

やがて世界大戰の火蓋は切られて、英國の男子と云ふ男子は悉く祖國の爲に奮起した。タイパー卿も、祖先より傳はる愛國の

血を湧かして從軍した。かうした時戰爭心理に醉はされた多くの女性は、何もかも忘れて出征の軍人を見送つた。ノナも亦其の例に漏れず、夫の出征を無上の光榮として一時セイパーの事など忘れてハシヤイだ。この時セイパーは、戰爭の動亂よりも恐しい、甘い嵐のやうな心の動搖の爲に幾日となく惱まさるゝのであつた。

バーチ青年も出征を志願したが、年老いた母を保護する人がゐないので空しく日を過した。これを見たセイパーは商會の印刷工場の監督ブライトの獨娘エッフイを勸めて、バーチの留守中老母の世話を一任する事にした。一方商會では、フオーチエンとトヲイエングが共謀で、セイパーを除け者にしやうと彼に從軍を勸めたが、彼は肯じなかつた。

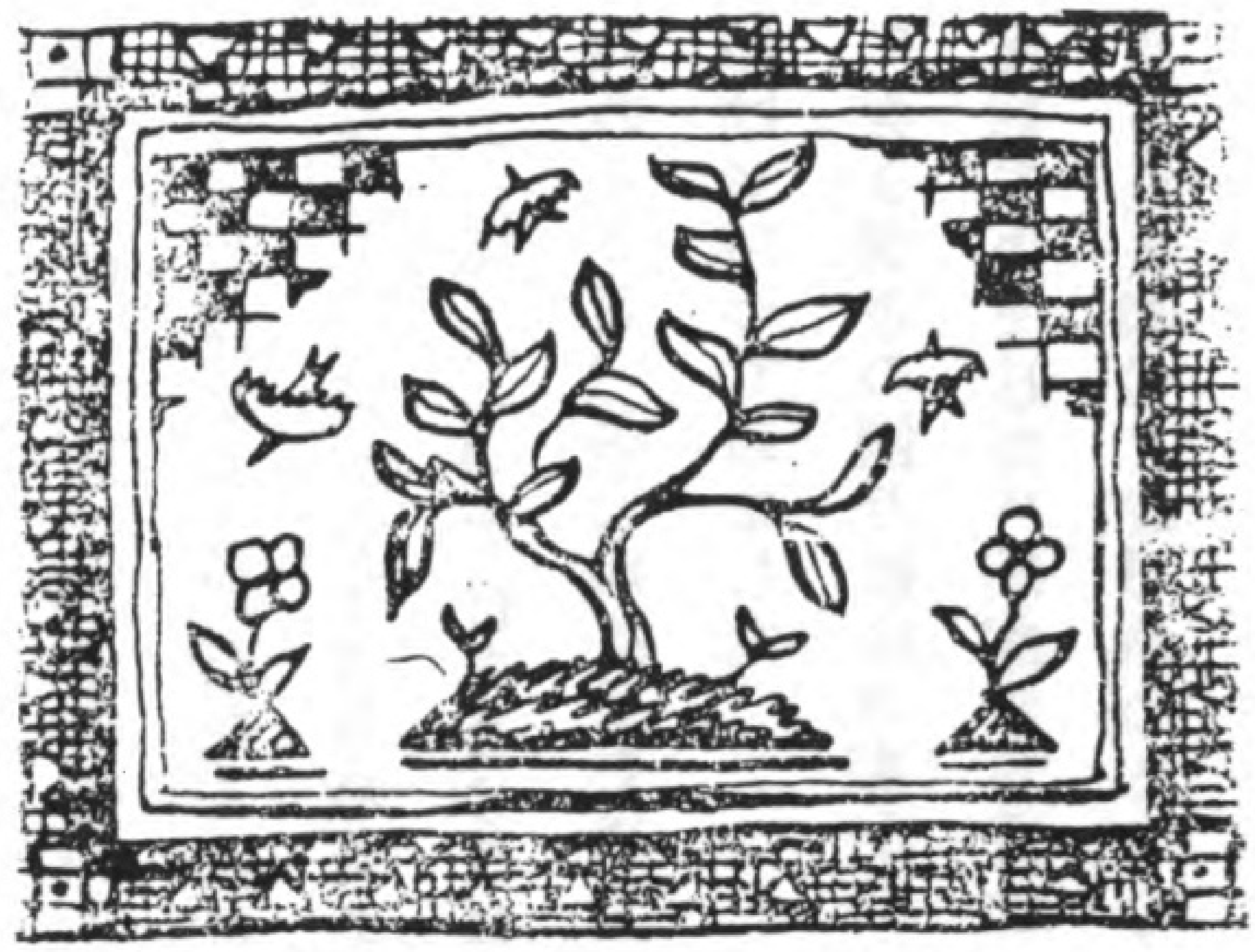
戰地にあつたタイパーは、軍功によつてヴイクトリ勳章を授けられた。ノナは毎日のやうに書面を送つて慰めてゐたのに、夫タイパー卿の彼の女に對する態度は、益々氷の如く冷かになつて來た。この時、心なきノナにも、始めて本當の自分をみつめる時が來た。夫との夫婦關係が永續しない事に氣づいた彼の女は、しみ〲自分の身の寂しさとやる瀬なさに泣き續けた。そして雨ふる夕シエレイの「西風に寄せる頌歌」「オゝ風よ冬來りなば春遠からじ」と云ふ詩をセイパーの許に送つてせめてもの慰めとしてゐた。

戰爭が續くと共に前途は暗膽として、悲しい報は方々に訪づれた。愛息バーチ青年の死報に接した老母は、悲歎と驚愕の餘りエッフイーの腕に抱かれたまゝ靜かに我がいとし子の後を追ふた。セイパーは、この氣の毒な老母の後始末の爲よ御通夜には親しく枕頭にあつて徹宵のみとりをした。そして其翌朝家に戻ると、妻のメーベルは柳眉を逆立てゝ憤り、若い娘のエッフイと共に無人の家に一夜を明した事を曲解して、絶對に信頼す可き夫セイパーを詰つた、かうした妻の無理解には、彼の心の惱みは益々深くなる許りで、彼も周圍の、重苦しい事情に堪え得られなくなつて、急に兵卒として從軍して行つた、

エッフイはセイパーの留守の家の召使として働らいてゐたが、何かにつけてメイベルが虐待し、セイパーとの間を疑ふので、長く使ふことが出來ないで解雇して仕舞ふた

タイパー卿も亦戰死した、流石にノナは少なからず淋しさを覺はたが、續いてセイパーが重傷を負ふて送還されたと聞いた時には心狂はんばかりであつた、これに引きかへ妻のメイベルは、夫セイパーに同情すら寄せず、冷然と迎へた。かうして時は默々として過ぎて行つた。

この時セイパーの家から追ひ出されたエッフイが、突然月滿ちて赤兒を生んだ、然し彼の女は父親の誰であるかを語らなかつた。セイパーはエッフイの境遇に同情し、自分の家に引き取つてやらうと妻に相談すると、二人の間を疑つてゐた妻のメイベルは、突然離婚を要求して、憤然として家を出て行つた、セイパーは手のつけやうがなかつた、此の事があつて數日、エッフイは突然自殺した、萬人の疑は一齊にセイパーに向けられ、トヲインゲの如きは、盛んにセイパーを陷入れんとして裁判問題迄惹起した、然し死んだエッフイ （三五頁へ）



「不仕合せ」

丹野てい子

むかしく、世界のづつとはづれの小さな村に、兄弟二人の百姓が住んでゐました。兄さんの方はお金持でしたが、弟はひどい貧乏百姓でした。兄の金持百姓は、町に住み、立派な家を建てゝ、商人になつてゐましたが、弟の方は、それにひきかへて、時々パンのかけらさへなくなり、小ちやな小供たちに、「何か食べさせてよう。何か食べさせてよう。」と泣きながらせびられることも度々ありました。弟は、朝から晩まで、毎日々々丁度氷の上に載せられたお魚のやうに、じたばたして働きつづけてゐましたが、それでも、いゝ運なんかちつとも向いて來ませんでした。

ある日弟は、おかみさんに、

「私はこれから、町の兄貴の家へ行つて來るよ。そして少し家の暮しを助けて下さいつて賴んで來よう。」と言つて、出かけて行きました。

町の兄さんの所へ行くと、弟は、

「ねえ兄さん、私のこの不仕合せを救つて下さいな。何しろ、子供も家内も食べるパンがないので、飢死してしまひそうなんですから。」と言つて賴みました。

「もしお前がこの一週間中俺の家で働くなら、どうにかしてやらう。」と兄は言ひました。

弟は喜んで、早速働きはじめました。庭を掃いたり、馬の手入れをしたり、水を汲んだり、薪を切つたりしました。そして一週間めに兄は、

「ほら、これを持つて行け。」と言つて、巻パンを一ツくれました。そして弟が、

「どうもありがたうございます。」と丁寧にお辭儀をして、急いで家へ歸らうとしますと、

「一寸、お待ち。明日もう一度來るがいゝ。丁度俺の誕生日だから、今度はお内儀さんを連てお客になつておいでよ。」

「どういたしまして兄さん。兄さんのお誕生日なら、毛皮の外套を着たり靴を穿いた立派なお客様が大ぜい來るのでせう。そこへ私達のやうに木靴を穿いて、灰色の上衣を着た百姓がとても行かれはしません。」と弟は辭退しました。

「そんな心配はしないがいゝ。お前達の席もこしらへておくから、ぜひくるがいゝよ。」

「それでは兄さん、ぜひ伺ひます。」と言つて弟は家へ歸つて行きました。

貧乏百姓の弟は家へ歸ると、兄さんに貰つた巻パンをお内儀さんに渡しました。そして、

「明日は、お前も俺もお客様に呼ばれるのだよ。」と言ひました。

「誰が私達をおよばれなんかに呼ぶのです?」

「兄さんが呼んで下さるのだよ。明日は兄さんのお誕生日だそうだからね。」

「それでは一所に行きませうね。」とお内儀さんも喜んで言ひました。

あくる日、弟夫婦は家を出て町へ行きました。そして金持の兄さんの家へ行つて、挨拶をして、部屋の隅の椅子に腰をかけて待つてゐました。

テーブルの圍りには、もう、多ぜいのお客様達が席についてゐました。兄さんはしきりに丁重に、お客さまたちをもてなしてゐました。けれども貧乏な弟夫婦のことは、すつかり忘れてしまつて、お茶一杯やらずに放つておきました。可愛さうな夫婦二人は、いつまでも〱そこへ腰かけて大ぜいのお客様たちが、食べたり飲んだりしてゐるのをただぼんやり

と見てゐるばかりでした。

お客さまたちは、御馳走を食べてしまふと、テーブルから立ち上り、兄夫婦に御禮を言つて、ぞろぞろと歸りかけました。弟夫婦も、いつまでも腰かけてゐるわけにも行きませんので、兄さんたちにお辭儀をして、家を出て行きました。御馳走になつて、お客さまたちは、お酒を飲んだりお腹一ぱい色々のものを食べたりしてゐるので、上機嫌で、唄を唄つたり騷いだりしながら歸つて行きました。弟夫婦は默つて、空いたお腹を抱へて、とぼとぼと歩いて行きました。暫くすると弟は、ふと、お内儀さんに、

「俺たちも、何か唄を唄はなくてはなるまい。」と言ひました。

「何といふ馬鹿なことを言ふんでせう。あの人たちはみんな、食べたいだけ食べたり飲んだりしたから、唄を唄つてゐるんじやありませんか。何も食べない私たちが、唄なんか唄へるものですか。」と、お内儀さんはぷりぷりして言ひました

「まあ、併し、俺たちは、とにかく兄さんの誕生日に呼ばれたお客なんじやあないか。どうも、唄も唄はずに默つて歸るのは景氣が惡いよ。唄を唄つて行けば、俺たちだつて御馳走になつて歸つて行くやうに見えるじやあないか。」

「私はいやです。唄ひたければ、勝手に唄ひなさい」とお内儀さんは言ひました。

そこで百姓の弟は、一人で聲をはり上げて唄つて行きました。すると暫くすると、何だか自分の聲にまじつて、別の聲が聞えて來るやうな氣がしました。弟は立ち止まつて、お内儀さんに向ひ、

「おまへは、今、私と一所に小さな聲で唄つてゐたのかい?」と聞きました。

「何をつまらないことを言つてゐるのです。私は、一言だつてものを言ひはしませんよ。」とお内儀さんは言ひました。

「そんなら今のは何だつたらう。」

「そんなことを誰が知るもんですか。まあまあお唱ひなさい。私は聽いてゐますから。」とお内儀さんは言ひました。

そこで弟は、また、一人で唱ひはじめました。すると、別の聲がまた、聞えて來ました。

「側にゐるこの内儀さんが唱はないとすれば、まあ、『不仕合せ』つていふやうな奴でも、俺と一所に唱つてくれてゐるのかな。」と、弟は獨り言を言ひました。すると『不仕合せ』が、

「えゝ、さうです。私が貴方と一所に唱つてゐるんですよ。」と、はじめて口をきゝました。

「ふん、やつぱり、『不仕合せ』だつたのか。まあいゝ。さあ、二人で一所に唱はうじやあないか。」と、弟が言ひますと

「はい、どうぞよろしくお願ひ申します。私はいつまでも、貴方のお伴をいたしますから。」と、返事をして、『不仕合せ』はまたひいひいと小さな聲でうたひはじめました。

弟が唱ひながら家へ歸つて行きますと、『不仕合せ』は途中で弟を呼びとめて、酒屋へつれて行きました。

「おいおい。私はお金なんか持つてゐないんだよ。」と言ひますと、

「そんな御心配は御無用です。お金なんか要るものですか。何しろ貴方は牛毛の外套を持つていらつしやるでせう。それは、もうじき夏になるんですもの。要らないじやありませんか。まあ、酒屋へ行きませう。そしてお酒を飲みませうよ。」と『不合仕せ』はしきりにすゝめました。

そこで弟と『不仕合せ』とは酒屋へはいつて行きました。そして二人は牛毛の外套を酒屋の亭主にやつて、お酒をのみたいだけ飲んでしまひました。あくる日になりますと、『不仕合せは』、ゆうべお酒を飲んだから、今日は頭痛がして仕方がない。どうもこの頭痛は、もう一度お酒をのまなくては癒りそうもないと、ぶつぶつ言ひました。

「だつて私はお金を持つてゐないんだよ。」と弟が言ひますと、『不仕合せ』は、

「お金なんか要るもんですか。橇と車を持つていらつしやい。さうすれば、飲みたいだけ飲めますよ。」と言ひました。

そんなことをすれば、惡いにきまつてゐるのです。でも弟は、やつぱり『不仕合せ』から離れることが出來ませんでした橇と馬車とをとり出して、酒屋の店さきまで乗りつけて行きました。そしてそれを賣つて、二人でお酒を飲んでしまひました。次ぎの朝になると、『不仕合せ』は、また頭痛がすると言ひました。そして、もつとお酒を飲まなくては癒らないと

言ひました。今度は、鋤を賣つて、二人はお酒を飲んでしまひました。

一と月經つ内に、弟の家には、もう、何もなくなつてしまひました。住んでゐた家までも、隣りの人に賣つてしまひました。そしてそのお金はみんな酒屋で使つてしまひました。それでも「不仕合せ」は、まだ、やつて來て、

「ねえ、旦那。酒屋へ行かうじやありませんか。」と言つて誘ひました。

「いやいや、私はもう何も持つてゐないんだよ。」

「だつてお内儀さんが、更紗の布を二枚持つてゐるじやありませんか。切なんかは一枚あれば結構ですよ。」

弟は、たうとう布團まで持ち出して賣つてしまひました。そしてそれで、また、お酒をのみながら、「うん、これでもういよいよ何もなくなつてしまつた。家もなければ、着物だつて一枚もありはしない。俺のものだつて、内儀さんのものだつて、何一つ殘つては居ない。」と思ひました。

あくる朝、「不仕合せ」は起きて見て、家の中にはもう、何にも賣るやうなものがなくなつてるのに氣がつきました。そこで弟に向つて、

「ねえ、私は、まだまだお酒が飲み足りませんね。お隣りに行つて、牛を二頭と、車を借りていらつしやいよ。」と言ひました。弟は早速お隣りに行つて、

「どうか一寸の間私に、牛と車を貸して下さいませんか。その代り一週間、私は貴方の家でただ働きをいたしますよ。」と言ひました。

「いつたい、牛や車を何にお使ひになるのです？」と隣りの人は聞きました。

「森に薪をとりに行くのです。」

「それならよろしうございます。持つていらつしやい。だが、あんまり荷を積みすぎてはいけませんよ。」

「大丈夫ですとも。」と言つて、弟に牛を借りて行きました。そして「不仕合せ」と一所に車に乗つて野原へ出かけました

途中で「不仕合せ」は、
「この野原の眞中に、大きな石があるんですが御存じですか？」と聞きました。
「あゝ知つてゐるよ。」と弟が答へますと、
「では、その石を堀りかへしませうよ。」と「不仕合せ」が言ひました。
二人は石のところまで行つて車を下りました。「不仕合せ」は、自分も手傳ひながら、弟に石を持ち上げさせました。石の下には大きな穴があつて、金が一ぱい充つてゐました。
「ほら、こんなに澤山お金があるでせう？これを出來るだけ早く車に積み込むのです。」と「不仕合せ」が言ひました。弟は、せつせと、車に積みました。しまひには、一番底に殘つてゐる金貨まで拾ひ集めてしまひました。そして、もう穴の中には何もないのを見てから「不仕合せ」に向つて、
「もう、一かけも殘つてゐないかい？」と聞きました。
「えゝ、もう見えないやうですね。」と「不仕合せ」は答へました。
「穴を下りて行つてごらん。何だか隅の方で何かが光つてゐるやうだよ。」
「いゝえ、何も光つてはゐませんよ。」
「だが、まあ、穴の中に下りて行つてごらんよ。たしかに見えるのだから。」
さう言はれて、「不仕合せ」は、穴の中に下りて行きました。
「不仕合せ」が穴の中に入ると、すぐに、弟は、さつきの大きな石を、ころがして、そのふたをしてしまひました。
「うん、これでやうやく安心だ。なぜつて、もしも俺が、お前を一所につれて歸つたら、また、この金は、みんな酒代になつてしまふんだからなあ。」と言つて、弟は、金貨を積んだ車に一人で載つて、家へ歸つて來ました。そしてそれをみんな穴藏にあけてしまひました。それから、牛や車を隣りの家へ返し、材木を買つて來て、大きな家を建てました。そして兄

さんよりも、二倍も金持になつてしまひました。それから弟は、馬車に乘つて町へ出かけて行きました。

そして、商人の兄さん夫婦に、どうぞ明日は私の誕生日ですからいらして下さい。と頼みました。

「何を馬鹿なことを言つてゐるのだい？お前は自分の食べるパンさへ、ろくろくないんじやあないか。それに、誕生日のお祝をするなんて、あきれた話だね。」と兄さんは、馬鹿にした顔をしていひました。

「でも、兄さん。それは昔のことです。今じやあもう兄さんと同じやうに金持ちになつたのですよ。」と弟は言ひました。

「うん、それなら行かう。」兄さんは言ひました。

次ぎの日になると、兄はお内儀さんをつれて、弟の誕生日に出かけて行きました。そしてあの、飢死しかゝつてゐた弟が、いつの間にかすつかり金持になつて、町のどんな商人だつて持つてゐそうもない立派な家に住んでゐるのを見て、すつかりびつくりしてしまひました。弟は、兄さんたちに、色々な美事な御馳走をしました。

「だが、お前はどうしてこんなに金持になつたのかい？」と、兄さんは暫くして弟に聞きました。弟は、今まであつたことをすつかり話しました。兄さんの誕生日に呼ばれた歸り途に「不仕合せ」がついて來たことや、その「不仕合せ」が酒屋にばつかりつれて行つたことや、おかげで家も道具も、おしひまには小切まで賣りつくしてお酒を飲んだことや、たうとう「不仕合せ」が野原へつれて行つて金貨を堀らしたことや、そこで「不仕合せ」から、ようやく逃げ出したことなど話しました

金持の兄さんはそれを聞くと、羨やましくなりました。そして、

「ひとつ、野原へ行つて、その「不仕合せ」を押し込めてある穴の石を、堀りかへしてやらう。さうすれば「不仕合せ」はきつとこの弟の體を八ツ裂きにするにちがひない。それで、つまり、弟の奴は、俺の前でこんなに金持になつたことを見せびらかせなくなるわけだ。」と考へました。そう考へると、兄は、早速、お内儀さんを一人殘して、自分は野原へ行きました。その野原の眞中の大きな石を、やつとこさところがしてどけると、石の下に何があるか見ようと穴の中に首をつつこんで覗いて見ました。すると、兄が首を出すか出さない内に、いきなり「不仕合せ」が飛び出して來ました。そして兄の

肩にしつかりとしがみつくと、

「いくらこゝに俺をおいてきぼりにしようたつて、承知するものか。」とどなりました。

「いやいや、ちがふよちがふよ。お前をこゝに押し込めたのは俺じやないよ」と兄は一生懸命になつて叫びました。

「そんなら、誰だつていふんだ？」と、「不仕合せ」は怖い顔をして言ひました。

「俺の弟だよ。」

「いゝや、いくらお前が嘘をついて、瞞かさうとしたつて、瞞かされるものか。俺をこゝに押し込めたのは、お前にきまつてゐる。誰が、お前から離れるものか。」と、「不仕合せ」はどなりつづけました。

それから「不仕合せ」は、金持の商人の肩にしがみつききりになりました。兄は、「不仕合せ」と一所に自分の家へ歸つて來ました。兄の家は、だん〳〵惡くなるばつかりでした。毎日々々、朝早くから、夜おくまで、「不仕合せ」は兄を酒屋へ伴れて行きました。兄の家の財産は、ます〳〵減つて行きました。たうとう兄は、

「こんな暮しは、もうとても、我慢が出來ない。」

今までこれだけ「不仕合せ」の奴に、おつとめをした上は、もう、かんべんしてもらはなくてはやり切れない。とにかく俺は、どうにかしよう。と考へはじめました。

兄は、それから、考へて〳〵、考へぬいて、裏庭へ下りて行きました。樫の木で楔を二つこしらへました。それから新しい車を出して來て車の心棒に、楔を　つ打ち込みました。そして「不仕合せ」のところへ行つて、

「さあさあ、そんなに家の中にごろごろねころんでゐないで、ちつと外へ出て來たらいゝじやないか？」と誘ひました。

「外へ出て行つて何をするんだい。何も面白いことはないじやあないか。」と「不仕合せ」は面倒くささうにいひました。

「まあ、庭へ出ておいでよ。かくれん坊でもして遊ばうじやないか。」と兄はまた誘ひました。

「不仕合せ」は、や　とこさと、兄の後からついて出て來ました。そして裏庭へ出ると、二人はかくれん坊をはじめまし

た。最初は兄がかくれて、「不仕合せ」が鬼になりました。兄は、すぐ、「不仕合せ」に見つけられてしまひました。それで今度は、「不仕合せ」がかくれなければならなくなりましたが、「不仕合せ」は得意な顔をして、

「今度は、なかなか見つけられはしないよ　俺といへば、どんなわれ目にだつてはいり込むことが出來るんだから。」といばつて言ひました。

「ふん、そんなにゐばつたつて、すき間はとにかく、お前は、この車の楔の間にさへはいることは出來まい。」と兄は言ひました。

「何だつて、この車の中にはいることが出來まいつて？どんなに俺樣が立派にはいれるか、まあ、見てゐるがいゝ。」と「不仕合せ」はどなりました。そしていきなり、車の軸の穴にもぐり込みました。兄は、殘しておいた樫の木の楔をとり出して、片がはから、軸につき込みました、そして、「不仕合せ」を中におし込めたまゝ、車を河岸まで引いて行きました。

そこで「不仕合せ」が、河の中に溺れさせられたかどうか、それはまあ、このつぎお話しいたしませう。とにかく、兄さんはそれから、前のやうに仕合せにくらすことが出來るやうになつたさうです。

（ロシア民話）

編輯室にて

新しい年を迎へるにあたつて、いろ〳〵と御抱負も多くお元氣の事と思ひます。いつも正月になると思ふことですが、私たちのやうに、かうして故郷を離れて旅の空で越年をするといふことは、樂しみも面白みもないものでございます。あの子供時代に二本の手の指を折つても未だ足りないほど、早くから正月を樂しみにして待つてゐたあの氣持だけでも思ひ出して見たいと思ふけれ共、田舍の人たちのするやうな昔風な町の粧ひもなく、まして、私のやうに雪國に――私は福井――育つたものにはお正月だと云ふのに、雪も降らずポカ〳〵と暖かい陽ざしが差し込んで來るやうでは、どうしても正月氣分になれません。

◇

この雜誌を讀んでゐて下さる方の九部通りは地方に在住の方ですが、平生は忙しく仕事におはれてゐても、さすがに年の初めだけは、みんな一樣にゆつくりとくつろいだ氣持で、久しぶりでものも考へやう、本も讀まふといふ風に、各地にばら〳〵と別れてはゐても、ある共通した一つの氣持で自分をとり返して、內を反省し、そと、社會を考へてゐるのではありますまいか。

◇

何と云つても、わが一婦人と勞働―はわが國にたつた一つしかない婦人解放運動の機關雜誌であります。本誌は婦人の地位の向上を希ひ、婦人の解放を望まれる全ての人の前に開放してあります。わたしたちは非常に微力にて、思ふ事の十分の一も百分の一も働らけないでゐるけれ共、そのために力をくぢかれず、反つて、婦人としての私たちが、いつも、事、志と違うて苦しめられ、弱められ、阻まれ勝ちであるだけに、一層この仕事に對する熱と力とが湧き立つのであります。

私は全國的に未だ相みず、相語る機會のなかつた人々――而も、ひそかに現在の婦人の社會的地位に就いて思ひ患つてゐられる人たちと親しくなり度いと切に思ひます。地方にかくれて、目立たないけれ共　眞劍にものを思ふてゐられる方々、どうぞ聲をかけ、手を差出して下さい。（ためお）

本號に限り特價三十錢

誌代	
一部	二十錢　郵稅　一錢
一年分（郵稅共）	二圓四十錢
半年分（郵稅共）	一圓二十錢

送金
誌代は必ず前金の事
送金は振替で願ひます
郵券代用は一割增のこと
誌代の受取は別に出しません

大正十三年十二月廿七日印刷納本
大正十四年一月一日發行

發行編輯兼印刷人　東京市外巣鴨町一〇一九　奥むめお

印刷所　東京市外西巣鴨町六六〇　香柏社　電話小石川五一八四

發行所　東京市外巣鴨町一〇一九　職業婦人社　振替東京六四一六〇番

謹賀新年

新校舍が落成しました。タイプライターは最新式の新品を使用してをります。

東京市四谷區片町四十六

タイピスト養成 模範女學院

電話四谷四八九五號

新年號要目

過去の一年は編輯者の手習ひであつた。本號を以て創刊號と思ひたい。

謹んで新年を賀し奉る

本年も不相變御引立の程を

1925年元旦

諸版印刷
原稿作製
和洋製本

東京市外西巣鴨町六六〇番地
庚申塚停留所際

香柏社印刷部

電話小石川五一八四番

内外宗教
及各種
新刊書類

東京市外池袋堀之内一〇三五番地

香柏社書店

振替口座（東京三三三二〇〇番
長野四一三二番）

出張所
丸の内ビルデング二階二九六大信銀行内
【電話牛込六四八〇番】

大正十三年十一月二十二日第三種郵便物認可
大正十三年十二月二十九日印刷納本
大正十四年一月一日發行

婦人と勞働

第三卷第一號

【本號に限り特價三十錢】

東京巣鴨　職業婦人社　振替東京六四一六〇番